
Giselle

源

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G i s e l l e

【Nコード】

N 5 7 1 6 I

【作者名】

源

【あらすじ】

時は現代。突如謎の生物ケルビムが徘徊し始め、世界は混乱し恐怖する。愛する者は喰われ、亡くした者は慟哭する。平和な日常は消えた。人類はケルビムに奪われた平和を取り戻すため、戦うことを決意する。

ケルビムの脅威に晒されながらも、まだ平和に近い日常を送っていた鷹白凜。彼女はあるきっかけにより、その戦いへの一步を踏み出すこととなる。

D i e s i r a e I

十二月二十四日十六時十三分。町は燃えていた。夕方の穏やかさはそこにはなく、町は血と肉塊と悲鳴で溢れていた。十数分前までクリスマスモードの漂っていた町は炎と血で赤く染まり、人々は逃げ惑っていた。

辺りには三本の爪で引き裂かれたような人間や食い千切られたような人間の死骸が無数にあった。そのなかに妙な形をした死骸がある。周りの死骸と比べると二周りほど近く大きく、その口からは大きな牙が生えている。頭からは一本の角。大きく見開かれた目は闇色だった。爪は猛獣のそれのように鋭い。異形は既に絶命していた。その更に向こうと見ると、そこにも異形の死骸があった。形はまったく違い、牛の骨の頭にそれに合わせて大きくなつた鳥の体。

それを見て「まるで漫画の世界だ」と呟きながら少年は異形の横を通り過ぎる。その声には何処か焦りが含まれていた。人や異形の死骸を横目に痛めた足を引きずり、少年は歩いていく。その死骸の中に大切な人が含まれていないように祈りながら。

少年は妹やその友人、自分の友人と待ち合わせしていた公園へ向かった。今日は遊ぶ約束があつたのだ。妹にはクリスマスプレゼントを買う約束をしていた。怪我はしていないだろうか、泣いてはいないだろうかと痛む足を引きずりながら思う。

友人は妹達を守ってくれているだろうか。彼女も女だからあまり無理はさせたくないけど。死骸に躓き転びながら考える。もうすぐ公園だ。服や顔を死骸の血で汚しながら起き上がる。意識が遠のきそうな痛みに耐えながら、また歩き出す。気持ちは焦るばかりなのに体は言うことを聞かず、走ることができなかつた。

もどかしさに苛ついているうちに公園へ着いた。公園に植えられ

ていた木は燃え上がり、酷い熱気を放っていた。休む間もなく歩き回り、妹達を探す。熱気と痛みに汗が流れる。それにも構わず探し回るがそれらしき姿は見当たらない。そのうち公園を一周し、最初に出た地点へ戻る。妹達の姿がないことに安堵するが、不安も覚える。何処にいるのだろうと。溜息を吐き、辺りを見る。公園内も少年がここにたどり着くまでに見てきた場所と同じで、死骸だらけだった。

そこで少年はふと思う。妹達の姿は血塗れで気づかなかったかもしれない、と。自分の考えたことに首を横に振り、両頬を叩いてそんなことはないと言いつける。だが一度覚えてしまった不安はそう簡単には拭えず、少年はまた歩き出す。今度は辺りをじっくりと見ながら。

そうやって歩き始めて5分も経たないうちだった。少年は見覚えのある服を見つけてしまった。まさかそんなと思いながら近づいていく。近づけば近づくほどその形は見知ったものに近づく。そしてその目の前に立った。それは間違いなく少年の探していた妹だった。周りにはその友人達。自分の友人はいなかった。頭の中が真っ白になる。何も考えられなくなる。ただ自分の祈りが届かなかったことだけはわかった。

「なまこ 雑斗……」

木の燃える音で聞き逃しそうになるほど小さな声で名前を呼ばれる。振り返ると友人が立っていた。全身が血に濡れていた。少年の記憶では明るく快活な笑顔を浮かべていた友人。だが目の前の友人は顔を血や泥、傷で汚し、いつもの笑顔はない。そして左腕の肘から先がなかった。

「ごめ、ん……あたし……この子達のこと、守れなかった……」

口から血を、焦点の定まらない目から涙を流しながら友人は言う。少年は「大丈夫か」と近づき、友人の体を支えてやると手が血で濡れた。満身創痍になっていた友人を見ていられず、たまらず友人を抱きしめた。友人の背中には木片が刺さっていた。胸元でこぼつ、

と嫌な音がして、続いて胸が濡れる感じがした。慌てて友人を見ると、げほげほと咳き込みながら血を吐き出していた。

「まさか……ちょ……と目離れた隙に、いなくなる……なん、て……」

声が涙混じりになる。妹達を守れなかったことを友人も悔いているようだった。

「ごめん……雑斗……ごめんね……」

それだけ言うと、友人は地面に崩れ落ちた。その体の下から赤が広がる。友人の目は虚ろなまま少しだけ開かれていた。少年はその場から動けなかった。

大切な人を一気に失ったショックが、少年をその場に縛り付けていた。涙もでなかった。

そうやって立ち尽くしてから少しばかり経ってからだだった。少年の背後から男が一人近づいてきた。

「死んだのか」

少年は答えない。男の言葉は少年に届いていなかった。今の少年にとってその問いかけは酷く無意味なものだった。

「生き返してやる、と言ったらどうする」

男は構わず続ける。すると少年は少しだけ動いた。

「ただしタダで、というわけにはいかない。私が満足するまで私の研究に付き合ってもらおう。これから先何があってもだ」

少年はゆっくりと男のほうを振り返る。その目に光はなかった。

「その子ども達の生き返らせる代わりに君の人生をもらおう。そこまですぐに思っているなら、そんな悪い条件ではないと思うんだが」

男は手を差し出す。少年は体ごと振り返る。顔を上げ男の顔を見ると目が合った。剣呑な雰囲気を感じたその目は、触れるだけで切れるような刃のようだった。

だが少年は自分の手を差し出した。今少年の背後に倒れている子

ども達や友人は等しく大切に思うものであり、少年は大切なものが戻るなら自分が傷つくことも厭わなかった。少年は男の手を取る。

「これは生涯結び続ける契約になる。それでもいいのかね？」

こくり、と少年は頷く。男の手をしっかりと握り、少年はまっすぐ男の目を見つめてきた。

「なら今この瞬間から君と私は友人だ。付き合ってもらおうよ」

そう言って男は少年から離れ、その背後で息絶えている子ども達に近づき膝をつく。それに羽織っていた白衣のポケットから出した薬を口内に流し込みながら、男は口角をつりあげた。

怒りの日、その日は

ダビデとシビラの預言のとおり

世界が灰燼に帰す日です。

審判者があらわれて

すべてが厳しく裁かれるとき

その恐ろしさはどれほどでしょうか。

怒りの日 (Dies irae)

O m e n

「失礼しました」

職員室から出て教室へ向かう。鞆を取りに行かなきゃならない。教室へ向かう途中、前から見知った人間が歩いてきた。

「凜！」

「真城」

隣のクラスにいる友人の樋森真城だ。脱色して色素の薄くなった髪が一步踏み出すたびに揺れる。

「どうだった？」

「無事退学しました」

前に学校を辞めるという話をしていたときから色々心配してくれていたらしい。真城の性格を考えると今も心配して来てくれたんだと思う。肩にリュックサックを担ぎ、片手にはあたしの鞆を持っていた。

目の前で止まり、鞆を差し出してくる。

「ありがとう」

受け取ったシヨルダーバックを肩にかけ、二人並んで歩き出す。

「ついに凜も退学か……」

「寂しい？」

「言つと図に乗るから言いたくないけど寂しい」

あたしはその言葉に満足して笑う。

「学校辞めたら料理の勉強に専念するんだっけか」

「そ。定食屋鷹白の跡継ぎとしては今は学校のお勉強より料理のお勉強をしたいのですよ」

大分前からちらほらと考えていたことではあるが、ここ二、三ヶ月でその考えは大きく膨らんでいった。自分の気持ちに正直に生きる。小さな頃からそういうふう生きてきたあたしは今度のことでも、そのときの気持ちに正直になった。学校を辞めて料理一本に絞

るといふ方針に。

「お前らしいつちやらしいが……」

「遅かれ早かれこうなつてたと思つよ？ 三年になつてから辞めるよりマシじゃん」

「そりゃあそつなんだけどな」

ぐだぐだと喋りながら玄関を出る。仲の良い友達や後輩に手を振つて帰る。ふと真城のほうを見ると、他の生徒から遠巻きに見られたり少し避けられたりしていた。

「……真城これから大丈夫なの？」

「あん？ 何が？」

「相変わらず怖がられてるみたいだけど」

「あ……」

真城は何故か他の生徒に怖がられることが多い。比較のおとなしい生徒が集まっているこの学校では、真城のように先生に反発したり町中で喧嘩して呼び出しをくらう、なんて生徒は殆どいない。平和な学校の中では真城の存在は異質なものになっていた。それがあたしの目には新鮮に映つただけれど。

「まあ別に近づいてこなくてもいいわ。めんどくせえし」

「日向が似たようなこと言つてた。近づかれても困るつて」

日向というのは真城と同じクラスの男の子だ。真城と違つておとなしい。おとなしすぎて困るくらいおとなしかった。見た目もおとなしいせい、それで絡まれて困ることも多々あるらしい。

「夏堂かどうがあ？ あいつそんなこと言つのか」

真城がさも意外そうに言う。

「結構スパツと言つてくれるよ！。最初はびっくりしたけど、もう慣れちゃつた」

人を見た目で判断しちゃいけないね、という真城も頷いた。

「ん、噂をすれば」

前方に見知つた後姿があつた。柔らかそうな茶色の癖毛が風に揺れる。……日向だ。

「日向ー！」

声をかけるとその場で立ち止まって、振り返る。無感情だが何処か寂しげな目があたしを見た。

二人で立ち止まった日向の側までいく。

「今帰り？」

「……はい。今日は特にやりたいことがないので」

にこりともせず日向が返事を返してくる。

「そっかー。あ、そうだ。前にも話してたと思うけど、学校辞めることになったから。っていうか辞めてきた」

「……随分早く行動に移したんですね」

善は急げっていうしね、というところ日向はそうですねと言った。特に何も感じてないような顔だった。無表情というんだろっか。極端に感情を表に出さない。周りからするとやりにくい相手のらしい。

真城も特に何も言わずにあたし達を見ていた。

今度は三人並んで歩き出す。あたしと日向は他愛のない話をしたが、真城は参加しなかった。

「そういえばここ2、3日サイレンならないね」

「そうですね。それだけ平和な証拠ですが」

サイレン。それは現代社会では酷く重要な役割を果たしていた。

「ケルビムなんて発生しないほうがいいけど、サイレン鳴ってることに慣れちゃって何か寂しく感じちゃうな」

今の世界にはケルビムと名づけられた化け物がいる。この世界に当たり前のように存在する異物。人や動物を餌とするケルビム。それが人とは決して相容れない存在のものが発生していた。

「ケルビムの研究は相変わらず進まないらしいですね。どうしても死体の保存がネックになっているとか」

自衛隊や民間防衛組織、国家特別軍事機関であるSSMS (State Specially Military System)

がケルビムを倒し、ケルビム研究機関がその死体を持ち帰り研究する。そんなことも日常になっていたが、細胞崩壊が早いらしく解剖することすら叶わないことが殆どらしい。

「実際ケルビムの研究ってどこまで進んでるの？」

「死後30分で肉体が崩れて骨だけが残るというのと、ケルビムに最も有効なのはケルビムだということくらいで、研究なんて名ばかりですよ」

前半のは聞いたことがあった。ケルビムが倒され研究員が施設に運ぶまでに肉の部分が全て崩れてしまい、研究どころではない。仕方なく倒された現場で解剖するも、ケルビムの全てを知ることが不可能だったというニュースが数年前にあった。

「あとはケルビムには同じ形のもが存在しないってことくらいじゃないですか」

「研究は全然進んでないんだね」

「進めようもないでしょうから」

そんな話をしながら歩いていると日向が立ち止まった。

「僕は本屋に用があるので、ここで失礼します」

「ん、じゃーねー」

手を振って見送ると、今まで黙っていた真城が微妙な顔をして言った。

「……お前この町に何年住んでるんだよ……」

「へ？」

「あつちに本屋なんてねーよ」

思わず日向が立ち去ったほうを見る。もちろん見えるのは近くの建物だけで本屋があるかどうかなんてわからない。だが町中を練り歩いている真城がいうのだから間違いないと思う。

「……逃げられた？」

「だろっな」

逃げられる理由がなんとなく思い当たり、頭を掻く。

「やっぱりあたしと日向って相性悪いのかな？」

「お前は誰にでも普通に接するし、夏堂は人を寄せ付けたがらないだろ。そりゃ悪いわ」

「ですよー」

今まで日向みたいなタイプは何度も見てきたけど、逃げられたのは初めての経験だった。ただ単にあたしが気がついていないだけかもしれないが。

「つーかお前本屋の位置くらい覚えとけよ。料理雑誌とか見に行かないのか」

「全部図書館で立ち読みして覚えます」

親指を立てて言うとき真城は呆れ顔だった。

「変なところですよ！頭の良さを誇るな。成績は悪いくせに」

「失礼な！中の下だよ！」

腕を振り上げて抗議する。真城だって似たようなもんだろうと言おうと思ったが、言うのを頭を叩かれるので止めておいた。

「お世辞にも良いとは言えないよな。兄貴はすげえ頭良いつて聞いたけど。本当に兄妹か？」

「正真正銘兄妹だよ。そういえば兄ちゃん相変わらず行方不明なんだけど、何処行ったか知らない？」

「知るか馬鹿」

結局頭を叩かれた。

真城と別れ、住宅街に足を踏み入れる。人気がない場所までたどり着いたところで片膝をつく。酷い眩暈に額を押さえた。

ここ2、3ヶ月ほど、ずっとこんな感じだ。頭を思いつきり石か何かで殴られたんじゃないかと思うほどの頭痛、何度も転んでしまふほどの立ちくらみ、胃の中の物を全部出さなきゃ治まらない吐き気、座り込んでしばらく動けないような眩暈。

原因はわかってきた。ケルビム退治による火器使用・ケルビムの血液から発生する物質による空気汚染だ。あたしの鼻は特にそれを

敏感に感じ取るらしく、それによって毎日のように何らかの症状が出ていた。正直精神が磨り減る。

しかしこういう症状が出るのはあたし一人ではない。具合の悪さを訴えるのは周りも同じだった。薬局に症状を緩和する薬が出回るほどだ。珍しいことでもない。それだけこの空気汚染も一般的なものになっていた。

ただ一つ、あたしには周りとは違うことがあった。ケルビムの発生を嗅ぎ取ることだ。

「あ」

目の前に小さなケルビムがいた。こちらに向かって這いずつてくる。ウミウシのような外見にギョロロと大きな一つ目。その下の丸く開いた口には牙がびっしりと生えていた。

こうなるとやることは一つだった。あたしは拳を振り上げ、ケルビムに向かって思いつきり振り下ろした。ぐちゃっという嫌な音と感触と共に、ケルビムは声も上げずに絶命する。

するとあたしの体調はすーっと良くなっていった。ケルビムの血を直に嗅いでしまい、すぐに立ちくらみを起こしたが、耐えられないほどではない。あたしはどうかやら、空気汚染よりケルビムが発生するほうが体調不良が酷いようだった。

手についた血液をそのままに歩き出す。すぐ近くに公園で手を洗った。そうすると体調はほぼ完全に良くなる。ほぼ、とついてもうのが悲しいところだ。ケルビムが発生したりケルビム退治があるかぎり、完全にはならないだろう。

公園を抜け、自宅に向かって歩き出す。『定食屋鷹白』という暖簾をくぐり、店内に入っていく。

「ただいまー」

日常の終わり

「ただいまー」

「おかえり」

暖簾をくぐり店内に入ると、すぐに母ちゃんが声をかけてくれた。といっても、店内の掃除をしながらだからか、こつちを見もしなかったが。

「おかえりー」

するとカウンター席に座っていた一人が声をかけてくる。

「瑞希ちゃん。いらつしやい」

「いらつしやいましたー」

加賀瑞希。この常連で、あたしのお姉ちゃん代わりでもある。

仕事の都合か、昼食を取るのがいつも遅く、あたしが学校から帰る頃に店に来てはご飯を食べていく。傍らには何枚かの紙があった。

隣に座り、紙を見してみる。

「えーっと……『ケルビム討伐に有効な手段はケルビムの血液や骨を武器として使うことではないかという』……。これこの間もメモってなかったっけ？」

「メモった。一週間くらい前にもメモった記憶がある」

水を飲む瑞希ちゃんの眉間に皺がよる。

「もー！ 同じネタばかりで全然駄目！ また編集長に怒られるじゃない！」

「ほこりが立つから暴れんじやないよ」

両手を振り上げて瑞希ちゃんが吠えると、母ちゃんがその頭に拳骨した。痛みに頭を抱えて堪える。

「いやね小夜おばちゃん。ホントあたしらライターには死活問題なのよ。毎回毎回同じネタを読者に届けるわけにはいかないでしょ？」

瑞希ちゃんは週に一度発行され各家庭に配られるケルビムの情報をまとめている小冊子のライターをやっている。最近は新しい情報

はまったくないそうだ。……最近どころかここ何ヶ月も同じ情報のような気もするが。

「そりゃあね。新しい情報を求めてる連中にや、そんなもん出されたってイライラするだけさ。しかしほこりを立てていい理由にはならない」

「だよな」

母ちゃんは店の奥へ掃除道具を片付け、カウンターに戻ってきた。あたしの隣の席に座りタバコを吸い始める。

「母ちゃん。ご飯食べてる人の前でタバコ吸うのもどうなの？」

「アンタ達の前で遠慮する気はないよ」

そう言っただけであたしの顔に煙を吹きかける。久しぶりにかけられると酷く煙たくて、ゲホゲホと咳き込んでしまった。

「そっぴや瑞希ちゃんのところは兄ちゃんから連絡きてる？」

「雑斗からあ？ あいつ結構寂しがりぐせして連絡なんて全然してこないよ？」

あたし達との話で食べるのを中断していたご飯を食べつつ、答える。兄ちゃんの幼馴染でずっと交流をもっていた瑞希ちゃんのことなら何か連絡が来ているかと思っただが、どうやらそうでもないらしい。雑斗兄ちゃんは一人でいるのを嫌い、いつもならしつこいくらい連絡を入れてくるのに、ここ数ヶ月はさっぱりだった。ここにも顔を出していないというし、そろそろ生死を疑っている。昔からふらつといなくなるときがあったので、連絡が取れないことなんて何度もあったのだけど。

「なんだい。雑斗が恋しくなったかい？」

「いや……あれだけ連絡きてたのがぱったり来なくなると寂しいというか……」

恋しい、というのとは違うと信じたい。そこまでブラコンではないと思いたい。一応十代後半だし。寂しいというのはあるが、それよりも無性に気になるのだ。

「ま、あいつのことだからそのうちひょっこり顔出すって。気にす

るだけ損だと思っわよ」

そう言って口の中にお漬物を放り込み、カウンターにお金を置く。「ごちそうさまー」

瑞希ちゃんは席から立ち上がり、じゃあねと言って手を振って店を出て行った。

それから三日後の早朝。学校を辞めたあたしは店で出す料理の仕込を手伝っていた。考えることは雑斗兄ちゃんのことばかりで、どうにも料理の勉強にも身が入らない。そんな考え事をしながら包丁を握っていたのが悪かった。手を滑らせて包丁を手放してしまった。「あ」

右足に鋭い痛みがはしる。足元には包丁が刺さっていた。

「~~~~~ッ！」

痛みに涙が出てくる。痛みを堪えて下を見ると、足元に若干の血溜まりが出来ていた。

「母ちゃん……。足切ったー……」

涙声でそう言っくと母ちゃんが奥からやってきた。しゃがみこんで足を見て溜息をつく。

「病院行ってきな。タクシー呼ぶから」

「はあい……」

この状態で元気でいられるはずもなく、足をひきずって適当な席に座る。母ちゃんが持ってきたタオルで傷口を押さえて、タクシーの到着を待つことにした。

病院で治療を受けて、近くの公園のベンチでくつろぐ。正直結構な痛みで歩くのがつらい。携帯を開き電源を入れ、メールがきてないか確認する。すると母ちゃんからメールがきていた。

『帰りに人参と大根を三本ずつ買って帰ること』

怪我をした愛娘をいたわる気はないらしい。少しだけ切なくなつた。

休憩をほどほどにしてスーパーへ向かい、頼まれたものを買う。足は痛むが、多少慣れたのか治療を受けた直後よりは楽に歩くことが出来た。

歩く合間に少しの休憩を入れて歩き続ける。タクシーを拾おうかとも思ったがお金もかかるし足の痛みもそこまで酷くないので止めた。

そうして歩き続けていると喉と頭の奥のほうに不快感を感じ始めた。構わず歩いていくと、それは段々と酷くなっていき吐き気に変わる。

近くにあつた電柱に手をつき、下を向く。喉から何かこみ上げてくる感じがして思わず口を押さえる。だけど嘔吐するまでには至らず、吐き気がなお酷くなった。頭がくらくらする。あまりに酷い吐き気に膝をついてしまった。目の前が歪む。苦しさに脂汗が流れる。

苦しさにしばらく耐えていると、ぺたぺたという音が聞こえてきた。それはだんだんと近づいてきた。そしてあたしの前で止まる。ぺたり、と頭に何か冷たいものが触れた。

「……………？」

ゆっくりと顔を上げていく。目の前はぼやけているが、そこにいたのが人間ではないことはわかった。体のラインが歪すぎる。両腕と下半身の筋肉だけが隆起し手の爪が長く尖っていた。フーツーツという呼吸音がどこか獣を連想させる。それ　ケルビムの手があたしの頭に触れていた。

頭を掴まれ持ち上げられる。足が地面に着かない。ああ殺されるなど、あたしの冷静な部分が考えていた。だけど死ぬ気はない。まだやりたいことはたくさんあるし痛いのは嫌だし、何よりこんな死に方は嫌だった。何故かそれらの考えは他人事のように思えた。恐怖心も殆どない。ただ目の前のケルビムから逃げなければという思

いがあった。

ケルビムの手に力がこもり、本格的にあたしの頭を砕きにかかってきた。それだけでもつらいのに宙ぶらりん状態のあたしの体のせいで首に負担がかかる。感覚的には頭が砕かれるのが先か、頭と体が離れるのが先かと行っていたところだ。

つらさを堪え、右足を頭を掴んでる手へと蹴り上げる。それから両腕でケルビムの腕を掴んで体を持ち上げ、思いつきり顔面へと蹴りを入れた。

ケルビムは蹴りを入れた足を掴み、地面へあたしを叩きつける。咄嗟に左腕で庇い、ダメージを抑える。

すぐに起き上がり、ケルビムに背を向けて走り出す。時折後ろを振り返ると足はこっちのほうが早いらしく、どんどん距離が開いてきていた。曲がり角を曲がったところで側にあった塀と塀の間に身を隠す。そこでやっと一息つき、ケルビムをやり過ごそうと考える。深呼吸をすると吐き気も少し治まってきた。視界もはっきりしてくる。

しばらくしてぺたぺたという足音が聞こえてきた。息を潜め、通り過ぎるのを待つ。が、ケルビムはあたしが入り込んだ隙間を覗き、腕を伸ばしてきた。その先の爪があたしの腕をかすり、傷をつける。急いで反対側に逃げ、塀の間を抜けて走り出す。

何でいる場所がばれたんだろう。そんなことを考えながら走り続け、側の電柱につけられていたボタンを叩く。すると町中にサイレンが鳴り響いた。

後ろを振り返ると四つん這いになったケルビムが迫っていた。どうやらさっきの追いかけてこでは手を抜いてくれていたらしい。

「はや……っ！」

四つん這いになったケルビムは予想以上に足が速く、すぐにでも追いつかれそうだった。だが、そんなとき前方からこっちに向かつて走ってくる影があった。向かい合って走っているせいか、ものすごく早く走っているように見えるが、それにしても異様に速かった。

その影はあっという間に大きくなり、刀を持った同じくらいの年の子だとわかった。

その子はあたしの横を通り過ぎる。ショート黒髪に映える黄色の目の残像が瞼の裏に残る。振り返ってその子を見ると、ケルビムの繰り出した一撃を前方に跳躍して避け、すぐに蹴りを繰り出す。その一撃は重かったようで、ケルビムは怯む。しかしすぐに攻撃を再開、腕を振り上げ、叩き潰す勢いで振り下ろした。その一撃は片腕で受け止められ、振り払われる。

刀を鞘から抜いて、心臓部分（と思われる）場所に突き立て、頭上に向けて振り抜く。ケルビムは切られた箇所から血を噴出し、倒れた。

それと同時にあたしの具合は格段に良くなった。吐き気もどこへやら、というのがいつもの状態のはずなのだが……。

ケルビムをあつさりと倒してしまったその子は刀を振って血を落とし、鞘に収めた。

「ちょ……はあ、早い……！」

後ろから男の声が聞こえて、驚いて振り返る。

そこには明るい茶髪をしたスーツを着た男が両膝を押さえて激しく息をしていた。

「お前が遅いんだ」

ケルビムを倒した子がこっちに向かって歩いてくる。そしてあたしの腕を掴む。何故かくらり、と目の前が揺らいだが、何とか根性で踏みとどまる。

「……傷は浅いな。病院へ行くか？」

「へっ？あ、いや……大丈夫、だと思っ……」

ここ数分の非現実的な状況から急に現実に戻され、変な声が出てしまった。

「そうか」

その子はそう言ってポケットからハンカチを出し、怪我をした部分に縛り付けた。そして何も言わずに歩いて行ってしまふ。

「あ、ちよつと流しゅう！？ あーもう、さつさと行つちやうんだから…」

男の人はその背を見送り、あたしの方を向いた。その右目には眼帯をつけていた。

「大丈夫だった？ びつくりしたでしょ、あんなのに襲われて」

それがケルビムのことだと気づくのに、またちよつと時間がかかった。どうやらあたしは予想以上にケルビムとの追いかけて引きずっているらしい。

「でも…間に合つてよかったよ。サイレンで僕達を呼んでくれても、ね」

その言葉にハツとする。サイレンを鳴らして助けを呼んでも、助けが間に合わずケルビムにやられてしまう人もいるのだということ思い出した。それを考えるとあたしはラッキーだったと思うべきなんだろう。

「ところで君…その腕以外に何処か怪我してるよね？」
「え？」

その怪我というのはあたしの足のことだろう。だけど何でこの人が怪我のことを知っているんだ。

「怪我してるときは外に出ないほうがいい。ケルビムは血に引き寄せられる」

柔らかい笑顔でそう言われ、体が緊張で固まる。それと同時に遠くのほうからサイレンが聞こえた。

「そんなわけだから、気をつけてね。それから急いで帰るように」
そう言つてその人は走り去ってしまった。

あたしはいえ、緊張が解けた途端足の痛みと、買い物袋を置いてきてしまったことを思い出し凹んでいた。

「つてことが二日前にあつたわけよ」

隣に立つ真城にそう言う。あれから二日経つた今日、あたしは真

城と共に襲われた場所へ来ていた。

「……怪我治ってないんだから家でおとなしくしてろよ……」

はぁー、とあからさまに大きな溜息をつかれてしまったが気にせず歩く。

「で、お前の目的は何よ」

「お礼言い損ねたな」と思ってさ。で、言いたいからこの辺ろついでるんだけど会わないねー」

「サイレン鳴らしゃ関係者は来るんじゃないか？」

正直それも考えたのだが、いたずら目的の使用で罰金を食らう可能性があつたし、何より残り少ない良心が痛むので止めておいた。

「っていつかこの状況って、怪我したお前という俺も危険なんじゃないのか」

「それもそうだね」

笑ってそういうと頭を叩かれた。

目の前が歪み、頭がふらつく。真城に心配をかけたくないので膝をつくのは我慢。これ以上酷くなればついてしまつかもしれないけど。

「まあまた襲われることなんてそんな……」

ずるり、と背後から聞こえた。

吐き気があたしを襲う。二日前ほど酷くないのが救いか。

「あー……」

「振り返りたくねえなあ……」

真城に目配せをしてあたし達は全力で走り始めた。幸い足の傷は良い感じに塞がり始めていたので全力でも大丈夫だった。だが。

「うおっ!?!」

真城の体に触手のようなものが絡みついている。ケルビムのものだ。

「えーっと！ あたしは逃げたらいいの!?!」

「助けるよ馬鹿!」

「ですよね!」

自分が襲われているわけじゃないせいか、あたしの頭は少し混乱気味だ。

近くにあった交通安全の旗を蹴りでへし折り、触手に突き立てる。「よし！ 切れた！」

旗を捨て走り出す。真城も走りながら触手を取っていた。近くにあったサイレンのボタンを押し、あたし達は助けが来るまで走り続けた。

間もなくSSMSの人達が助けに来てくれたが、二日前にあたしを助けてくれた二人組に会うことはなかった。

カーマインレッド

真城と一緒にケルビムに襲われてから一週間が経った。あたしはあれ以来ケルビムに会うことも、あの二人組に会うこともなかった。サイレンの鳴ってるところに行けば会えるかと思ったけど、そこまで体張ってもしょうがないだろうと真城に言われ、何処かで会えることを願いつつ普通の生活を送っていた。

「凜、買い物行ってきな」

「はい」

無くなりそうなものを確認して店を出る。自転車に乗り商店街へ向かった。

大体の買い物を終え、自転車置き場へ向かうときだった。

町中を通り過ぎる人達に紛れて女の子を見つけた。明るい（といふよりは白に近い）金髪の女の子だった。大きな目は血のような赤色をしている。あたしは妙にその目に惹きつけられた。よく見たらその子は裸足だ。それが気になり、あたしはその子の前まで行くとき膝について視線を合わせた。

「お嬢ちゃん、靴はどうしたの？」

そう語りかけても何も答えなかった。でもこっちを見るから一応あたしの存在は認識しているらしい。

「お父さんとかお母さんは？」

それでもその子は何も答えない。

このまま裸足で歩かせるのは危ないなと思った。あちこちに石やガラス片が転がっている。

「おいで」

そう言つとその子はいってきた。靴屋まで行き、子ども用の靴を見てまわる。

「どれか欲しい靴ある？」

その子はキヨロキヨロと辺りを見渡し、歩き始める。それから五分もしないうちにある靴の前で立ち止まった。その靴は赤いころんとしたデザインの靴だった。

「それがいい？」

やっぱり答えは返ってこなかったけど、あたしはその靴を取り、履かせてみようとして止まる。

「足拭いたほうがいいよね……」

ポケットからハンカチを取り出し、足を拭く。女の子はされるがままだった。

拭き終わってから改めて靴を履かせる。その靴は少し大きかったから棚に戻そうとしたら靴を掴まれた。

「……これがいいの？」

頷きもしなかった。でもこの靴をじつと見つめている。

子どもなんてすぐ大きくなるか、そう考えてあたしはその靴をレジに持っていった。

「やっぱりちよつと大きいけどいいか」

靴を履かせて近くのベンチに座る。女の子は足をブラブラさせてはコンコン、と靴をぶつけ合っていた。

「気に入った？」

「……………」

女の子はあたしをじつと見た後、また靴をコンコンとやり始める。さつきから言葉は話さないし、にこりもしないのが少し気になったが無口で無愛想なだけだろうと思うことにした。言葉が話せない人もいるしなあと思いつつ頭を撫でる。少し気持ち良さそうだった。

そうやっていて十分も経ってからだろうか。女の子はふいに顔を上げた。

あたしはその視線の先を追うが、特に何も見当たらない。女の子の家族がいたわけでもなさそうな感じた。

女の子が立ち上がったので、つられて立ち上がると、突然吐き気と立ちくらみに襲われ膝をついてしまう。

「う……………」

ケルビムだ。

脳内で警報が鳴る。吐き気やら立ちくらみやらが来るときは大体ケルビムが近くにいるときだ。

「……………」

女の子のほうを見てみると、一点だけを見つめていた。何を見ているのかはわからない。ただ、何かを知っているような顔だった。

ガルルルウオオオオオオ!!!

町の右手のほうから獣の大きな咆哮が響いた。続いて悲鳴。その両方がだんだんと近づいてくる。そして視界に入る場所で鮮血が迸った。

町の人達は泣き叫び逃げ回り、ケルビムに食いちぎられていく。

犬のような容姿で体長2メートルはあるケルビムは以前会ったケルビムより獰猛だった。

「ここは危ないから逃げて!」

側に立っていた女の子の肩を掴み言う。女の子はあたしを見た後じっとケルビムを見つめていたけど、すぐにあたしに背を向けて走り出した。

あたしは荷物を置き、近くの旗を蹴ってへし折る。あちこちに旗があるので武器にし放題だなあという雑念が湧いたが、すぐに捨てた。

旗を右手に持ち走り出す。ケルビムのすぐ近くにあったプランターを台に跳躍し、顔面に突き立てた。

背後を見て足が竦んで動けない人や転んでる人達に「早く逃げて!」と言う。

ケルビムが怯んでいるうちに近くにあったサイレンを鳴らす。早

く助けが来てくれますようにお願いながら。

気晴らしに外を歩いているときだった。商店街のほうからサイレンが聞こえた。最近では商店街にもケルビムが出るようになってたのか、と呑気に思う。

そのとき、携帯電話からゲコゲコ、と蛙の鳴き声の着信音が鳴った。

「もしもし」

『雑斗！ お前今何処にいる？』

「商店街の近く」

『じゃあお前行ってくれ！ 他の連中がそっちのほうにいないんだ』

正直めんどい、と言うと電話の向こうの幼馴染にも上の方々にも怒られるんだろうなと思う。それでもケルビム討伐に携わる者なのかと。

「仕方ないなあ。ちゃっちゃと片付けてくるよ」

そう言って電話を切るが、武器がないことに気づく。自分の武器は長物の武器であり、それは持ち歩くのに適さないのだ。手持ちはあまり得意ではない銃と使い慣れないナイフだ。

「ふむ」

何か良い武器は無いものだろうかと辺りを見回すと、交通安全の旗が立っていた。

「刺すくらいなら出来そうだね」

旗を掴み、蹴りを入れてへし折る。結構頑丈出来ているので、まあ簡易的な武器としては上々だろうと一人頷く。

旗を肩に担ぎ、商店街へ走り出す。

近づくにつれ騒ぎの大きさがわかる。血もあちこちに飛び散っていた。血を辿っていくとすぐにケルビムの姿が見えてくる。誰か一人戦ってくれているらしい。幼馴染は他の人間がいらないと言ってい

た、戦つてくれている人物は偶然近くを通りかかっていたか、民間防衛組織である桐端家きりはしの人間だろう。何だか見覚えもあるし。男はそう結論付けて走り出す。

ケルビムの右脇から抉るように旗を突き刺し、抜いて更に一撃。ケルビムの返り血がかかったが気にしない。ただ口に入った血液だけは吐き出した。旗を抜き心臓部に向かって突き立てる。

反対側にいる人間も正面から一撃食らわせたらしく、男のほうに向かつてケルビムが傾く。

旗はそのままに横に避けると、ケルビムは地面に倒れこみしばらく苦しそうにもがいた後、息絶えた。

ふう、と一息つき周りの惨状を見る。怪我人はざつと十名。死者はそれより少ないくらいかと思う。また政府に提出する書類を書かねばならないと思っていると、後ろから声をかけられた。

「……兄ちゃん？」

正直な話、前のケルビムとは比べ物にならないくらい凶暴なケルビムだった。今日こそ死ぬんじゃないだろうかと思っていると誰かがケルビムの背後から攻撃してきたのがわかる。多分助けが来たんだろうと思った。予想以上に早いうえに攻撃も的確で助かった。

ケルビムが倒れ、助けにきてくれた人はすぐ辺りを見ていたが。

黒ぶちの眼鏡に肩くらの一括りにされた茶髪。目つきが母ちゃんに似たその人は。

「……兄ちゃん？」

そう声をかけると男の人は固まり、何処かぎこちない動きでこちらを振り返った。

「……り、ん？」

「やっぱり！ 兄ちゃんだ！」

そう。ここ数ヶ月連絡をくれなかった兄だった。

「え、ちょ、ちょっと待って？ 何でここにいるの？」

スタスタと近寄ってきて肩を掴まれる。

「つていうか何で戦って？ 民間防衛に入ったの？」

兄ちゃんはどうやら少し混乱気味らしい。あたしは口を挟む暇がない。

「そうだ怪我は？ 怪我してない！？」

あたしの答えを待たず体を見始める。

「してないしてない。落ち着いて兄ちゃん」

運良く怪我はしていなかった。

「とりあえず怪我人どうにかしたほうがいいんじゃない？ 救急車呼ばなきゃ」

「あ、うん。そうだね」

それから二人で怪我人を運んだり救急車を呼んだり、片付けたり。その間にSSMSと民間防衛組織の人達もやってきて、辺りはあつという間に片付いた。怪我人が十一人、死者は七人。被害は大きかった。

その間にケルビムの体は融解して骨だけになった。その現象は初めて見るけど、あまり気分のいいものじゃなかった。

「やっぱり守りきれるもんじゃやないんだね……」

そういうと、兄ちゃんは困ったように笑う。

「結局僕達も人間だからね。SSMSや民間防衛……桐端家の人員も全然足りてないし。そんなこと言っても民間は全然納得してくれないけど」

兄ちゃんの視線の先を辿ると、助けに来た人達が町の人に掴みかかられていた。

「何でもっと早く来れなかった！ 早く来てくれれば家内は……家内は……！」

「申し訳ありません」

そう言って頭を下げる人がいた。

「……自分達が助からなきゃ意味がない。そりゃそうだよな」

ため息と一緒に兄ちゃんの口から吐き出される言葉は重かった。

大体の人達が撤収してから、あたし達は近くの公園に来た。兄ちゃんも自販機であたしの分のお茶と自分の分のコーヒーを買って持ってくる。

「それで凜は何であそこに？」

「いや……町の人達が襲われてたからつい……」

「勝機もないの？」

そこを突かれると痛かった。勝機なんて全然考えずに飛び出してしまったからだ。

お茶の入ったペットボトルのキャップを捻って開け、一口。中身は緑茶だったが、家で飲むものより少し苦く、香りが悪かった。

「そうなんだけどさ……危ないとかそれより、助けなきゃって気持ちになっちゃって……」

「昔っから正義感強かったもんねえ」

正義感が強いわけではないと思っただけ、そういうことになるんだろうか。

「っていつか学校は？ この時間まだ学校だよな？ まさかと思っただけどサボりじゃないよね」

「辞めた」

一言すっぱりと言うと、兄ちゃんはコーヒーを噴き出した。

「辞め……っ!？」

「別にやりたいことがあったから辞めたの」

何でもないことのように言うと、兄ちゃんはポカーンという効果音が似合いそうな顔をしていた。

「よく母ちゃんが許可したね」

「案外すんなりOKしてくれたよ。びっくりした」

「そっか……」

それからしばし無言で二人で飲み物を飲んでいると、見たことのある姿がこっちに向かって走ってきた。

「倉坂！」

「ありやミナセくん。どうしたの？」

「どうしたのじゃないよ。寄り道してる場合じゃ……あれ？」

「あ。この間の人」

ケルビムに襲われたときに助けてくれた人だった。今日は刀を持つてた子はいないらしい。

「……会ったの？」

「うん。危ないところ助けてもらった。この間はありがとうございました」

頭を下げると、いいんだよと言って笑っていた。

「ミナセくん。何があったかは知らないけど……」

兄ちゃんはミナセと呼ばれた人に近づいていく。

「僕の可愛い妹に手を出したりしてないだろうね？」

「うるさいよシスコン」

一刀両断だ。

「っていうか倉坂の妹さんだったんだ。道理で何処かで見たことあると思った」

「へ？」

「よく写真見てニヤニヤ気持ちの悪い笑みを……」

何とも居た堪れない気持ちになり、二人から目を逸らす。あたしはブラコンではないようだ。

「可愛い妹の写真見てニヤニヤして何が悪いの」

「……開き直りだ。ここまで行くと何も言えない。」

「ところで助けてもらったって何？」

「ケルビムに襲われてたんだよ。ね？」

「うん。死ぬかと思った」

兄ちゃんは持っていたコーヒー缶を落とす。心なしか顔色も悪い気がするけど、多分気のせいだろう。兄ちゃんの今の雰囲気 genauso 思わせるのだ。

「襲われた？」

「うん」

「ケルビムに？」

「うん」

今にも掴みかかってきそうな勢いだなあと思っていたら本当に掴みかかってきた。

「大丈夫だった！？ 怪我は？ 殴られたりしなかった？」

「かすっただけだから大丈夫。それよりもその前の怪我のほうが…

…」

そこまで言っただけで済むと思った。

「その前の怪我！？ 何それ！」

「いや、包丁持ってるときに手滑らせて足をスパツと」

「ヒイ！ 大丈夫だった!？」

何だか再会してから会話がループしてるなあと思ったがシスコンの成せる業なんだろうか。

「今はもう傷も塞がってるよ。ほら、回復力すごいから」

兄ちゃんの顔が少し曇った気がする。

「そっか」

あたしの頭を髪が乱れるほど撫でまくり、笑った。

「で、ミナセくんはどうしたの？」

「今回の被害状況の報告とかあるでしょ」

「それ僕がやらなくてもいいでしょ」

「どう考えても駄目でしょ。最初に来たんだから」

そんなミナセさんの言葉に兄ちゃんは不満げだ。

「それ……あたしがやっちゃ駄目なの？」

部外者だが最初にいたのはあたしなら、自分がやっては駄目なんだろうかと思う。いや駄目なんだろうけど。

「そういえば最初に戦ったのって凜かあ……。でもなあ……」

「倉坂がやらなさそうだから頼もうかな。SSMSに入隊することになるけど」

「入る入る」

軽く言つと兄ちゃんに腕を思いつきり掴まれた。

「何言つてんの！ S S M Sなんて危ないから駄目！」

「でも今の会話からすると兄ちゃんが入ってるんでしょ。兄ちゃんがよくてあたしは駄目ってのはないと思う！ っていうかない！」

別に軽い気持ちで入るわけではなかった。ケルビムがいなくなればあたしの具合が悪いことが一年の半分以上を占めることなんてなくなるし、安全も確保されるのだ。そこに至るまでにあたし自身に危険が及ぶ可能性があるというだけで。

「いいの？ 危険だよ？」

「駄目！ 絶対！」

強く言われ、思わずむっとする。ここまで駄目だと言われると意地でも反抗したくなつた。

「やる！ 兄ちゃんが何と言つてもやるからね！」

「凜！」

語気を強めて名前を呼ばれるが、あたしはそれでも引く気はなかった。

「人員が足りないんでしょ！？ あたしも学校辞めてやることなんて家の手伝いだけだし！ だったら問題ないじゃん！ 入るからね！」

捲くし立てるように言えば兄ちゃんは黙ってしまった。

「じゃあ施設の方で手続きしなきゃね」

「はい」

ミナセさんの方へ行くと、手を差し出された。

「ミナセ・フォーゲルだ。よろしく、凜」

「よろしく、ミナセさん」

「ミナセでいいよ。みんなそう呼ぶ」

握手を交わし、兄ちゃんのほつを見ると、思いつきり抵抗されたシヨックが固まっていた。

シスコンもここまで行けば病気だなあと思つた唇下がり。

「お。おかえり琴音^{ことね}」

建物の内部に入ると、すぐに男がこちらの存在に気がついた。

少女は廊下を歩いていていた男の下へパタパタと歩いていく。慣れない靴に少し歩きにくそうだ。

「ん？ お前その靴どうしたんだ」

「……………」

少女は何も答えない。ただぎゅうつと男にしがみついた。

男は少女を抱き上げ、頭を撫でる。

「誰か優しい奴が買ってくれたのかな。今度会ったら礼を言わなきゃな」

少女は男の少し癖のある髪が好きだった。指に絡めて遊び出す。

「さて。投薬しなきゃならない奴ら呼んでくるか」

男は少女を抱いたまま歩き出す。その先は電気も点いていない真っ暗な道だった。ただ非常口の誘導灯だけが煌々と輝いていた。

籠に買い物袋を入れ自転車を押す。行き先は実家だ。

八年前に両親が離婚して以来、実家には近寄っていなかった。それでも妹の凜とは連絡を取っていたが。

店の前に自転車を止め袋を持ち、店の前に立つ。久しぶりに会うとなると酷く緊張した。

深呼吸を三回して店の扉を開けた。

「いらっしやい」

何年振りかに聞く母親の声は少し噎れたように思える。

「久しぶり……母ちゃん」

そういうと母親はゆっくりと振り返った。

「なんだ雑斗かい」

母親は雑斗が来たことをまるで何でもない、当たり前とでもいうように受け入れた。緊張してきた分、雑斗は拍子抜けしてしまう。

「なんだって……ひどいなあ。久しぶりに会ったっていうのに」

「あたしはアンタがいつ来るのか気になってただけどねえ。八年も顔出さないなんて無精もいいとこだ」

店の中は昼も二時過ぎ、客は誰もいなかった。母親はカウンター席に座りタバコに火をつけた。

「あの馬鹿は元気かい」

「……元気だよ」

馬鹿、というのは恐らく父親のことを指しているのだろう。思うところはあったが、元気だと答えておく。

「そうかい。……まあ座んな」

「ん……うん」

なんとなく気恥ずかしくて母親から一つ離れた席に腰掛ける。

二人の間に長い沈黙が訪れる。

「それで、どうしたんだい。アンタのことだ。何の理由もなく来た

わけじゃないんだろう」

「どうやって話を切り出すか悩んでいたが、母親のほうから話を振ってくれる。空気を読んでくれたことをありがたく思う。」

「凜のことなんだけど」

「凜？どうかしたのかい。そういえば戻ってこないけど」

「今頃になって凜が戻ってこないことに気がついたらしい。相変わらずの放任主義に笑いが零れる。」

「SMSにね……入りたいっていうんだ」

「……………」

ケルビム討伐のために結成された国家特別軍事機関。明日の命の保障なんてない場所へ入りたいという凜の思いを母親に告げる。薙斗はそのために実家まで来ていた。

正直可愛い妹をSMSに入隊させるなんて絶対に許可しなくなかったが、凜に言われたとおり人員は不足していた。それこそ通りすぎる人全てに声をかけたいくらいに。

「情けないことに押し切られちゃってさ……。どうしたもんかと」

「いいんじゃないかい」

「は？」

「凜がやりたかって決めたなら、あたしは止めないよ」

母親から凜に言ってくれれば、さすがの凜も思いとどまるんじゃないかと思っていたのだが。

「危険な道だけど……アンタを押し切るほど気持ちが強いならねえ。」

「あたしが何言っても止めないよ、あの子は」

「本当に危ないんだよ！？ 毎日怪我して体がまともに傷負ってないことなんて当たり前で！」

「だろっねえ」

タバコの煙を吐き出し、何でもないように言う母親に愕然とした。「あの子のことだから遅かれ早かれこうなるとは思ってたよ。一方的にやられてる奴を放っておけない子だからね」

昔から喧嘩だ何だとやんちゃをしていた妹のことを、やはり母親

も熟知していた。確かに自分もいつかそうなるんじゃないかと思う部分はあったのだが。

「大体アンタも話の流れからするとSMSとやらに入ってるんだろ。自分はただケルビムの研究をしてるだけだとか言っておきながら……」

「やれやれ、と言ったふうに母親はため息をついた。

「アンタもやってるんだからあの子だって行くだろうよ。あの子は自分が思ってる以上にお兄ちゃんっ子だ」

その事実は嬉しいが、今は複雑な気持ちだった。

「そんなわけだから凜を止めたいならアンタが頑張りな。ご飯食べたくかい？」

「う、うん……」

思わずため息が漏れてしまう。凜に一番効果的な説得方法が母親だと思っていたんだが、一番の理解者もやはり母親だった。

「SMSは寮があるんだったね」

「あ、ああ、あるよ。共同部屋になるかどうかはわからないけど」

「それだったらアンタにちょっと気にしてほしいことがあるんだけど」

母親がいつになく真面目な顔をするので、倉坂は構えてしまう。

「あの子……何も言わないけど体調を崩すことがしょっちゅうあるみたいなんだ。あんまり酷くなるようだったら医者にでも引っ張っていっておくれ。顔に出さないようにするのも慣れてきたみたいだから判断するのは難しいかもしれないけど」

「……………!」

そして母親は料理を作り始める。味噌汁の良い香りとトントン、と包丁がまな板を叩く音が響く。

八年ぶりの母親の手料理を待ちながら、薙斗はどうやって凜を説得したらいいかよりも、凜の体調について頭を悩ませることとなった。

「これでいいの？」

SSMS入隊手続きを取るため、あたしは応接室のような場所（実際は執務室らしい）に来ていた。ミナセの話によると兄ちゃんの部屋らしいが。確かに周りを見てみると小さい頃あたしと撮った写真とか家族写真とかがある。昔から好きだった蛙のグッズとか。自分で稼ぐようになったせいと一緒に暮らしていた頃より蛙の置物などが増えていた。

「……うん、これでいいよ。お疲れさま」

ミナセはあたしが書いた書類を取り、兄ちゃんの仕事机に置く。それからティーポットに入ったお茶をあたしと自分のカップに注いだ。

「ありがとう」

少し冷めたお茶を飲む。間違えないように書くことに集中していたので、喉は緊張でカラカラだ。

「兄ちゃん……今頃母ちゃんにあたしを説得するように言ってるんだろうなあ」

はあ、とため息をつく。兄ちゃんに反抗することは出来たが、母ちゃんに言われるとあたしも弱い。もの見事に言いくるめられてしまうのだ。力いっぱい抵抗しても軽く流されてしまう。

「倉坂は凜のこと本当に大事みたいだからね。傷つけたくないんだよ」

「大事にしすぎてお嫁にも出してもらえなさそう。相手に殴りかかりそうだし」

アハハ、とミナセは笑う。

「確かにねえ。倉坂ならやりかねない」

本当にシスコンだなと思う。愛されるのは嬉しいんだけど、愛されすぎというのも何だかなあと言った感じだ。

そのときコンコンと扉が叩かれ、開かれる。そこには黒の短髪の懐かしい顔の人物が立っていた。

「いおちゃん!？」

「え? 凜!？」

兄ちゃんの幼馴染の咲嶋庵だ。なつきしまいおりあたしが小さい頃よく遊んでもらっていた。

「ちよつと待て。まさかお前SMSに入るのか!？」

「うん!」

いおちゃんは視線を仕事机へと向ける。それが兄ちゃんに向けた視線だと気づくのに時間はかからなかった。

「いおちゃんもSMSに入ってるの?」

「あ、ああ…… 薙斗と一緒に入ったんだよ」

困ったように言ういおちゃんに、自分はあまり歓迎されていないだなどと思う。兄ちゃんの気持ちを知ってるからなんだろうけど。

「それで庵はどうかしたの?」

助け舟を出すようにミナセがいおちゃんに話しかける。いおちゃんは持っていた書類を見せた。

「これをあの馬鹿に出そうと思ったんだけど…… いないみたいだな」

「実家に行くって言ってたよ。しばらくかかるかもって」

「そうか……」

仕方ないなと言って机に書類を置く。

「つてか凜、お前…… 薙斗の奴が何ていうか……」

「もう散々言われたよ。家にも母ちゃんにあたしを説得するように言いに行ってると思う」

「だろうなあ」

頭を掻いてため息と一緒に言う。いおちゃんにまでこんな反応をされると、さすがにちよつと悪いことをしたような気分になってくる。実際入ったことに後悔はないが(正式には兄ちゃんに書類を見せてかららしい)、少し凹む。

「いおりィ〜忘れ物!…… あれ? 誰かいるー?」

ひよこつと扉の影から女の子が顔を出す。あたしより短い茶髪で帽子を後ろ前に被っている。

「ああ。新しく入る凜だ。お前の後輩になるんだからな。いじめるんじゃないぞ」

「倉坂とかアゼルと違うもーん。いじめたりしないよー」

そしてあたしの前に来て手を差し出した。

「私は望^{のそみ}つていうんだーよろしくねー」

「よろしく」

握手を交わすと手を上下にブンブンと振り回された。どうやら元気が有り余ってるようだ。

「凜。施設の中を案内するよ。ついてきて」

ミナセに促され、あたしは部屋を出ていった。出て行くときに振り返って二人を見ると、望はいおちゃんに頭を撫でられていた。いおちゃんの表情は柔らかく、望の表情は子どものような嬉しそうなものだった。

「あの場にはいなかったけど、もう一人アゼルって子がいるんだ。金髪ショートヘアの子なんだけど……口悪いけど気にしないでね」
ミナセが苦笑いをする。真城も口が悪いほうだが、それを越えるのだろうか。

「あの子は？ 外で一緒にいた子」

「ああ。あの子はここの子じゃないんだ。民間防衛組織の桐端家の子」

「そつか。お礼言いたかったんだけどな」

「気にしなくてもいいよ。僕達は一般人を守るのが仕事なんだし」

「うん。でも助けてもらったことに変わりはないから」

廊下を歩きながら話していると、ミナセが立ち止まる。

「ここからが僕達の生活スペース。一階が主に台所とかの生活の要になる場所があるんだ。二階から上は施設員の部屋。凜の部屋もあとで案内するね」

それから台所やお風呂、図書室などの場所を教えてください。施設

員は自分達で勝手に食事を取るシステムらしく、みんな食べる時間がバラバラらしい。食材も自分で持ち込むもよし、置いてあるのを勝手に使うのもよしということらしい。勿論名前が書いてあるやつは使ってはいけないそうだ。

お風呂は温泉のような感じだった。広く一度に何人も入れ、シャワーもいくつもついている。

それから武器庫を教えてもらった。中には銃やナイフが置いてある。銃も色々な種類があり、ハンドガンからライフルまでと多種多様だった。武器は交通安全の旗くらいしか扱ったことがないと言うと、ミナセは苦笑いしながら「色々使ってみて、使いやすいのを探そうね」と言ってくれた。

「ここが階段ね。向こう側にも階段あるんだけど、たまに溜まり場になってるから気をつけてね」

それはどういう意味の溜まり場かと思ったけど、ミナセの顔を見る限り悪い意味での溜まり場のようだった。来てばかりで喧嘩沙汰は起こしたくないので、しばらくは通らないでおこうと思った。

二階へ行くと、同じような扉ばかりだった。部屋の扉にはプレートがかかっていて、それぞれに番号が振られている。その一つの前へ行くと、ミナセは扉をノックする。

「はい？」

中から初老の男性が現れる。

「新しい子が入ったので、部屋をお願いしたいんですが」

「ちよつと待つてくださいね」

男性は部屋に入っていく、何かを探しているようだった。そのうち何枚かの紙を持って戻ってくる。

「どの階も部屋が空いてますよ。この間ので欠員がたくさん出ましたからねえ」

疲れたように男性は言う。一ヶ月ほど前にあったケルビム討伐のことだろう。ケルビムが大量に発生してSSMSの人間が何十人と死んだという話を瑞希ちゃんから聞かされた。

「四階までありますけど、お嬢さんは何処の部屋がいいですか？」

「ミナセ達は何階にいるの？」

「僕とアゼルは二階、庵と望は三階、倉坂が四階だよ」

「ふむ」

二階にいればサイレンが鳴ったとき早く出られる。四階なら兄ちゃん頻りに顔を出しそうだ。

「三階がいいな」

「じゃあ鍵をお渡ししますね」

男性はまた部屋の中へと姿を消し、鍵を一つ持って戻ってきた。

「無くした時は言ってください。部屋の番号も忘れずに」

「はい」

鍵を手渡される。鍵についていたプレートには『307』と書かれていた。

「じゃあ行こうか」

二人して頭を下げると、男性も軽く頭を下げ部屋へと入っていた。

また階段をのぼり、右に曲がる。途中で人と会つとミナセが頭を下げるので、あたしも頭を下げしておく。それからすぐに部屋にたどり着いた。

「ここが凜の部屋だよ」

あたしの手から鍵を取り部屋の扉を開ける。中は六畳くらい。ベッドとテーブルと椅子、小さな棚とその上にテレビと、それなりのものが揃っていた。部屋の中にあつた扉を開けるとウォークインクローゼットがあつた。

「家具の配置を変えるのは自由だけど、壁紙変えるとかは止めてね。破ったとかそういうときはさっきの人に言うこと。ベッドのシーツを替えるとかカーテンを替えるのは許可されてる」

「了解」

部屋のなかにはシンプルにまとめられていて、棚には本や小物を入れておけそうだった。

考えてみれば一度服を取りに家まで行かなくてはならない。案内が終わったら取りに行こう。

「僕の部屋は229号室だから、何か困ったことがあったら来て。いないときは倉坂のところか外にいるよ」

「わかった」

今日からここで新生活が始まるのかと思うとドキドキする。危険と隣合せの生活の始まりでもあるけど、それでも足踏みしてるだけよりは幾分かマシだと思った。

ミナセの施設案内も終わり、あたしは一人ぶらぶらしていた。鍵をくれた人の部屋も覚えたし、ミナセの部屋も覚えた。兄ちゃん達の部屋番号はあとで聞こう。

一階まで行くと、庭らしき場所に出られる窓があった。外に行くと花や野菜が植えてある場所と草原があった。ところどころ木が植えてあり緑たつぷりで疲れた目に優しい場所だった。

草原の向こうに何かが見え、歩いていく。二分ほど歩いただろうか。たどり着いたそこは墓地だった。いくつものお墓がそこにあった。

「お墓か……」

「墓地だからな」

ボソリと呟いた一言に返事をされ、あたしは慌てて声の方向を見ようとする。慌てたせいか目の前が歪んだが気にせず振り返った。

そこにはミナセと一緒にいた子が仏花を持って立っていた。

その子はあたしがいる場所から少し離れたお墓へ行き、花を置いて手を合わせた。

「数日前までは一般人だったと思ったのだが？」

「あ、あたし今日入隊したんだ。鷹白凜っていうの。よろしく」

「……流」

流はぶっきらぼうに答えると、そのまま立ち去ろうとする。

「あ、ねえこっつて……」

その後姿に声をかけると、立ち止まってくれた。

「ここは施設員が死んだときのための墓地だ。……十二年前の事件での死者の墓もあるが」

十二年前。ケルビムが大量発生するようになった日のことだ。ケルビム事件と呼ばれ、百以上のケルビムに人々が襲われた事件だ。死者数も相当なものだったと聞く。

「そっか……。十二年前の事件で身元がわからない人のお墓があるって聞いたけど、ここなんだ」

「……あまりここには立ち寄らないほうがいい」

「え？」

「死に方が死に方だからな。出るって話だ。……それこそケルビムのような得体の知れないものかな」

背筋がぞわつとした。別に幽霊の存在を信じてるわけじゃないが、たしかに出る条件としてはぴったりな気がする。あまり気分のいいものではない。

「あ、あーそれよりさ。この間は助けてくれてありがとう」

そういつと流は驚いたように目を見開いた。

「……？　どうかした？」

「あ、いや……。あまりそういうことを言われたことがなかったから

……」

照れたように顔を逸らす流に笑いが零れる。その顔を見て、ふと思つ。

「流つてさ……。男？　女？」

「……」

微妙そうな顔を見てまずいこと言っただろうかと思う。男だったら女に見えたら嬉しくないだろうし、女でもそうだろう。ああ、どう考えてもまずいことを言った。恩を仇で返したかもしれない。

流を見てみると言いにくそうな顔で口を開いていた。そのとき。

「そいつは女だ」

声の方向を見ると金髪ショートヘアの子が立っていた。声で何とか男とわかるくらいの子の女寄りの顔をしていた。この子がアゼルかと思う。親の仇でも見つけたかのような目で流を見ていた。

アゼルは先ほど流がいた墓まで行き花を蹴りつけた。

「ちよつと！ 何してんの!?」

「そいつからの花なんていらない！」

理由はわからないが、アゼルは相当流を嫌っているようだった。

「だからって蹴ることないでしょ！」

「お前には関係ない！」

噛みつくようにアゼルは言うが、あたしも引く気にはならなかった。

「そつという問題!?!」

ああ言えばこう言う状態に愕然とした。そんななかでも流は平然としていた。

「構うな。いつものことだ」

「いつも!? いつもこんななの!?!」

流の表情から察するに、こんなことは何度もあったようだ。それも流が慣れるほどに。尚更許せるものじゃなかった。あたしは思わずアゼルに掴みかかる。

「あんたこんなことしてて恥ずかしくないの!? 人が供えたもん蹴りつけるなんて!」

「何言つてんだお前! こいつは俺達の……!」

「アゼル!」

アゼルの言葉を遮るように鋭い声がとんだ。声の先にはミナセが立っていた。

ミナセは墓の前の蹴りつけられて花びらの散った状態を見ただけで察したようだった。

「その花は…… 僕が流に買ってくるように頼んだんだよ。時間までに僕が施設入り口にいなかったら供えておいてほしいとも頼んだ。だから……」

「ミナセ……どういうつもりなんだよ。そいつにそんなこと頼むなんて」

憎憎しげに言葉を発するアゼルの顔からは、内面に渦巻く怒りはつきりと見て取れた。その顔にあたしは体の中に冷たいものが通るのを感じた。

「アゼルは連絡取れないし倉坂達も僕も忙しかったから……流なら頼めると思ったんだ」

悲痛な表情でそういうミナセに、アゼルは歯を噛み締めていた。そしてあたしのほうを見て口を開く。

「そいつの味方をするならお前も敵だ」

そう一言吐き捨てるように言うと、あたし達の横を通り立ち去った。

「……お前もアゼルの敵になるんじゃないのか？ ミナセ」

「アハハ、そうだね」

困ったように二人は笑っていたが、あたしはそれどころじゃなかった。ミナセから口が悪いと聞かされていたが、それよりも感じが悪かった。第一印象は最悪の一言に尽きる。

「凜、大丈夫？」

「……うん」

アゼル本人がいなくなると、アゼルの理不尽な行いへの怒りの発散のしようがなくなり、あたしは一人変な汗をかいていた。

「ごめんね、変なところ見せて。びっくりしたでしょ」

「いや……大丈夫……うん」

今までに感じが悪いのやら態度やら口やらが悪いのは散々見てきたつもりだったが、ここまで酷いのは初めてで、あたしの足りない頭では処理が追いつかなかった。

「元々虫の居所が悪かったんだろう。今日は特別機嫌が悪かったように思える。桐端の人間と衝突したのかもしれない」

「あー有り得る。喧嘩っ早いから会って早々言い合いしてきたかもね」

さも何でもないことのように二人は言っていた。普段からそんなのかと思うが、聞いてしまうと更に処理が追いつかない気がして聞けなかった。

「それより凜。一回家に帰らなくていいの？ 色々必要な物あるでしょ」

「あ、そうだった」

ミナセに言われて思い出す。家から服やら何やらを持ってくると母ちゃんと話をしてこなきゃならないだろう。アゼルのことはとりあえず隅に追いやって頭を切り替える。

「じゃあちよつと取りに行ってくる！」

「いつてらっしやい。気をつけて」

二人に手を振り、あたしはその場を走り去った。アゼルのことを少しでも忘れられるように全力で。

「あいつ、お前の仲間じゃないか？」

流は頭一つ分身長の違うミナセを見上げて言う。

「……うん」

「お前より長生きするといいな」

「させるよ。倉坂が怖いからね」

そう言う二人して笑う。

これから起こるであろうことに心を沈ませながら。

「あれ？ 庵」

実家から帰り執務室へ行くと、幼馴染の庵が仕事をしていた。傍らのソファーでは望が大きく口を開けて寝ていた。

「実家の方はどうだった」

「え……うん、美味しかったよ」

「誰も飯の話してねえよ馬鹿野郎」

机に置いてあった蛙のマスコットを投げつけられる。限定品なんだから粗雑に扱わないでほしいなあと思いつつながら空いているソファに腰掛けた。

「凜のやることだから止めるつもりないってさ。止めさせたきゃ自分で説得しろって」

「小夜おばさんらしい」

クツクツと庵が笑う。

「あとね……」

ずるり、と雑斗の背中が背もたれから滑り落ちる。顎がジャケツトの中に入り少しゴワゴワした。

「凜……しよっちゆう体調崩してるんじゃないかって……」

庵は何も言わなかった。それが何を意味するかを知っているからだ。倉坂は知っていた。

訓練開始

入隊した次の日から戦闘員としての訓練が始まった。

腹筋や背筋などの基本的なものから棒を持つての素振りなどだ。

腹筋や背筋など学校の体力測定以外ではやらないから酷くつらいものに感じた（とりあえず各五十回ずつと言われたが、その五十回が遠く感じる）。長さ一メートル弱の棒はただ持っただけならそこまです重いものでもないのだが振るとなると話は別だった。素振りなどのやったことのないものは筋肉が悲鳴を上げる。左から右へのフルスイングなど地獄だ。右上腕と脇腹が痛くてしょうがない。

こんな最初の段階で根を上げるつもりはないが、棒だけはどうにもならないくらいいつらかった。必要な力だからしょうがないと言われたらそれまでなので、絶対に言わないが。よくこんなで旗を振り回していたなと思う。あの時はつらいなどと考えてる場合ではなかったからかもしれない。

「少し休憩しようか」

基礎訓練が終わると同時にミナセが言う。あたしが訓練してる間ミナセはずっと見ていただけだった。

「見てるだけって退屈じゃない？」

「退屈だけど、何処かおかしいところがあつたら困るからね」

笑ってそう言われ、あたしもつられて笑う。

二人して地面に座り込む（ベンチなどと気の利いたものは一つも置かれていなかった。訓練してるときにうっかり壊してしまうことが多いらしい）。

ふう、と一息をつく。涼しい風があたしの汗ばんだ肌を撫でる。それがとても心地良かった。

「凜は何かスポーツとかやってた？」

「やってたよ。剣道と薙刀。三日で辞めたけど」

「三日……」

剣道は興味本位で習い、薙刀は兄ちゃんが習っていたのでついでに習ったのだが。

「飽きちゃってねー」

基本的なことは単調になりやすい。その単調さに飽きてその二つは辞めてしまったのだ。ただ単に振り方などを習っていただけなのだが。

「ここでは飽きたなんて言っても止められないからね。どうしても止めたかったらSSMSを辞めるしかない」

「わかってるよ」

ケルビムは脅威的だ。パワーも強く早さもある。普通に鍛えた人ではすぐにやられてしまうだろう。それならば鍛え続けるしかないのだ。……この単調な訓練をして。

「見た感じ凜は体が結構しっかりしてるから、ちょっと鍛えたら弱いケルビムならすぐ勝てるようになるんじゃないかな」

「見た感じって……あたしのことそんなに見」

「違います」

きっぱりと否定された。しかも敬語で。なんとなく悲しくなり話を戻すことにする。

「鍛える量少なくて済む？」

「大事なのでしっかり鍛えてください」

「はい」

そんなやりとりをし終わるとミナセが立ち上がる。

「じゃあ飽きつぱい凜のためにちよつと打ち合いでもしてみようか」
傍らにあった棒を持ってあたしに向けて軽く振る。横に置いてある棒を持つと言いたいらしい。棒を持って立ち上がると、ミナセは持っていた棒を左手で持つ。

「軽くでいいからね。まだ訓練あるから」

棒の先を軽く振ってくる。あたしは一步踏み込み軽く打つ。カン、と木同士が当たる濁いた音が響く。少し離れてもう一発。二発。三発。本当に軽い打ち合いなのでまったく緊張感がない。すぐに飽き

そんな予感がしたが、そのときミナセが踏み込んできた。振り下ろしを一発、すぐに斜め下に振り、振り上げ。一步離れてバツクハンドでの振り。ゆるやかに打っていたのが急にテンポが速くなり戸惑う。

「凜は急な変化に弱いのかな？」

笑顔で言いながら斜め上からの振り下ろし。少し力がこもっていた。

「ちょ、つとびっくりしただけだよ」

言葉を途切れさせながら言うミナセは笑っていた。さすがに余裕たっぷりだ。

カン、と棒を交えて止まる。

「ミナセの武器って何なの？」

「僕は銃だよ。ナイフも使うけど銃が殆ど」

スーツのジャケットをめくりホルスターを見せてくる。そこには大振りの銃が収まっていた。

「銃って大変じゃない？手入れとか撃ったときの反動とか」

「最初は大変だったよ。反動なんて特にね。衝撃が大きいのもあるけど基本的にここで支給されるのはオートマが殆どでね。連射なんてしようもんなら狙いが外れるのなんの」

銃については詳しくは知らないが、とりあえず狙いが外れると困るというのはわかった。

棒を打ち合わせ、先を促す。右から、左から、正面からと打ち、左に移動して右下から左上に向けて打つ。大きく一步下がりが左上から右下へ。このまま打ち合いを続けるものだと思っていたら棒を絡め取られ、押される。草地でやっていたためか足が滑り、そのまま倒れた。

「結構早かったね」

そんなミナセの声が聞こえ、頭だけ起こすとそこには封筒と恐らく刀が入っているであろう袋を持った流が立っていた。

「家にもやるものがなかったからな」

そう言って持っていた封筒を渡す。

「今朝までの被害状況の報告だ。中を見ればわかるが件数が多めだ。少し警戒を強めたほうがいいかもしれん」

「わかった。倉坂に伝えとく」

「……で、お前はいつまで寝転がってるんだ」

少しばかり冷たい目で見られ、あたしは起き上がる。

「押し倒されちゃった」

「如何わしい男だな」

「ちょ、別にそういう意味で押したわけじゃ……!!」

ミナセの慌てっぷりが明らかにあたしのとときと違う。これはもしかして、もしかするとなのかと思ひ見る。すごく困ったような顔をしていた。

「こ、これは訓練でね!? 流も来たし、そろそろ中断する頃かなと……」

「倒す必要はないと思うんだが……」

「倒れるとは思わなくて!」

「言い訳か?」

完全に主導権は流にあった。さっきまで余裕たっぷりだったミナセがあたふたしているのは見ていて楽しい。

「まあお前もいい年だしな。そういうこともあっていいとは思ってが昨日来たばかりの奴と外で、というのはどうかと」

「僕がそういうことするのは流だけっ!?!」

最後まで言い終わる前に流から刀の柄で一撃、鳩尾に食らう。動きが早すぎてが見えなかった。あれはつらい。

「次に外で言ったらすり潰す」

何を、とは言わなかったが。

「打ち合いか」

ミナセのお腹が回復するのを待ち、自分達がしていたことを説明

する。流も最初から何をしているかは承知していたみだが、さすがに可哀想になって二発目が入る前に止めに入ったのだ。

「懐かしいな。お前がもろに一撃食らって気絶していた」

「あー。あれのせいで流、余計アゼルに嫌われたんだよね」

その構図を想像するのは容易なことだった。

「あれ痛かったなあ。いつかりベンジしてやると思ってたけど、なかなか……」

「なら今やるか？ 木刀じゃなく棒、というのが何だが」

恐らくミナセは申し出を受けられるだろうと思いい、流に棒を差し出す。流は刀を地面に置いて棒を受け取り、軽く振っている。

「流強いんだよなあ……」

「怖いなら構わんが？」

挑発的な流の笑みにミナセは棒を構える。その顔は微妙に困ったような顔だ。

軽く棒を打ち合わせた後、流が大きく一步を踏み込み、その勢いのまま振り下ろす。ミナセはその一撃を棒を横にすることで受け止め、離れる。流が上段蹴りを放ち、受け止められたのを見ると蹴りで突き飛ばす。ミナセはそれによるけるが、すぐに体勢を立て直し下から一撃。それを紙一重で避け横薙ぎに一閃。避けられると懐に飛び込み、柄で顎を狙う。掴んで受け止めると、そのまま引っ張って倒そうとする。一步進んで倒れるのを阻止し、手を振り払い、脛に向かつて振り下ろす。

ふと建物側を見ると、アゼルがすごい形相で睨んでいた。鬼か。

どさつと音がして二人のほうを見ると、ミナセが尻餅をついていた。首元には流の持っている棒が突きつけられている。ミナセの負けだ。

もう一度建物側を見ると、アゼルが舌打ちして立ち去るところだった。やっぱり感じが悪い。

「こついうのじゃ流に勝てる気がしないよ……」

「慣れてるからな」

差し出された手を掴み、ミナセが立ち上がる。

「スーツ汚れちゃった」

困ったように言うが、その顔は笑っていた。心なしか嬉しそうにも見える。これは本当にひよっとしてひよっとするのではないだろうか。

「ミナセ嬉しそうだね」

「そ、そう？」

声を上擦らせて言う姿に、思わず嘔き出してしまう。流はその姿を見て、何処か複雑そうだ。

「二人って付き合ってるの？」

遠まわしに聞くのも面倒なので直球に聞いてみる。

「あ、うん」

「付き合ってるない」

ミナセと流の声が被る。何か言いたげな顔をして互いを見ている。目と目で会話をしているらしい姿に、笑いを堪えるのが大変だ。

流が首を振ると、ミナセも首を振る。流が睨みつけるとミナセは困ったように眉を寄せた後、笑って頷いた。

「付き合ってるないよ」

「ふーん」

複雑な事情がありそうだったので、その辺はさすがに突っ込まないでおいた。正直さっきのを見る限り付き合ってるのか付き合っていないのかは明らかかなような気もするのだが……。

その後基礎訓練をした後でまたミナセと打ち合いをして、流と打ち合いを試みたら三十秒と持たずに見事に倒された。もう少しくらい手加減してくれてもいいものを。

三度目の休憩を取っているときだった。比較的この場から近いところからサイレンが聞こえてきた。

その場にいたあたし達に緊張が走る。

「近いな」

「うん。行かなきゃね」

あたしはどうしたらいいんだろうって思っていると、声をかけられる。

「凜にも来てもらおうよ。ただし戦闘には参加せず、見てること。危ないと思ったら逃げてよし」

その言葉に頷くと、二人が走り出す。後ろからついていく形であたしも走り出した。

あたし達の他にも走っている人が3人ほどいた。それぞれ思い思いの武器を持っている。銃を持っている人が二人、ナイフが一人だ。そのうちの一人と目が合ったが、顎でクイ、と前を指される。二人に置いていかれないようにしろと言っているのか。

前を見ると、少し二人と距離が離れていた。慌ててスピードを上げる。

だんだんとケルビムが発生している位置に近づいているらしい。眩暈と吐き気がした。

路地を右に曲がったところで二人は立ち止まった。追突しそうになつて慌てて止まる。目の前には六体のケルビムがいた。

流が真っ先に走り出し、切りかかる。

「凜は気をつけて見ること。今は安全第一だから本当に危ないと思つたら僕達のことには気にしないで逃げるんだよ」

そう言うのと腰のホルスターから一丁、ジャケットの中から一丁取り出し構える。その顔も声も真面目そのものだった。

あたしは壁を背にし、周りを見る。

流はケルビムが振り下ろした腕を難なく避け、胸に刀を突き立て勢いよく上へと切り上げる。ケルビムは上半身を切り裂かれ倒れていった。

ミナセは両手に銃を持ち、それぞれ違う場所に照準を合わせているらしい。ドンドン、と重く鈍い音が連続して響き、ケルビムの頭と胸に銃弾が吸い込まれていく。

一緒に来た三人はといえば、ナイフの人はケルビムの一撃を上手く受け止め、ナイフを振り上げて腕を落とす。そうして怯んだ隙を見て銃二人がケルビムを仕留める、というスタイルのようだった。その間にもミナセと流は他のケルビムを倒していく。ケルビムの体液を浴びたりはしていたが、それ以外は特に外傷もないようだった。

「危ねえ！」

その声に弾かれるように振り返ると、ケルビムが迫っていた。振り下ろしてきた一撃をバックステップで避けると、あたしとケルビムの間は流が割り込んできた。

ケルビムは空いていた手を振り下ろす。流がそれを刀で受け止めると、背後から銃声が響いた。ケルビムは頭から体液を流し倒れていく。倒れると銃二人は駆け寄ってきて、すぐに心臓部に銃弾を打ち込んだ。

「ケルビムは再生力が高い。頭と心臓を潰しておけば確実だから、こうやって始末している」

流がみんながやっていることを説明してくれる。そういえばみんなそうやって頭と心臓を狙っていた。

銃弾を打ち込み終わると、周りを見渡し、武器を下ろす。

「大丈夫だった？」

ミナセが後ろから声をかけてくる。振り返ると先ほどのような顔はなく、いつもの柔和な笑顔があった。銃も既にホルスターに収めたらしい。

眩暈と吐き気も治まり、頭と喉に不調の余韻だけが残る。

「うん。……いつもこんなに出るの？」

「今日は一箇所に出るには多かったかな。全然別の場所と合わせて何匹も出るっていうのはあるんだけど」

あたしが一人にいるときにあった一匹と、真城といるときにあった一匹、兄ちゃんと会ったときの一匹。あるときも他の場所にケルビムが出ていたんだろうか。

「終わったから帰ろうか」

施設の方へ歩き出すと、流は反対方向へ歩いていく。

「俺は帰る」

「わかった。また明日」

「ああ」

短く言うと、流はそれ以降何も言わずに歩いていく。軽く手を振ると、流はそれを一瞥しただけで立ち去っていった。

台所でご飯を作る。今日のご飯は炒飯と中華スープだ。お盆に乗せ部屋へ運び、テーブルに置く。テーブルにはケルビム討伐から帰った後、図書室で借りたケルビム関連の資料が纏められたファイルがあった。

炒飯を食べつつファイルを捲る。

ケルビムとは 二十五年前、日本に発生したのが初。被害者は三名。一名が軽傷、二名が死亡。ケルビムは駆けつけた警察官二名により駆除される。これが一体何の生物なのか、研究所に持ち帰り調べようとしたところ、持ち込んだ段階で骨以外の組織が融解、研究は不可となる。その骨格は人に近く、頭蓋骨、両手足が犬に近いものだった。その後、一週間に二、三体のペースで発生。その度に警察が出動、駆除する。

この辺の情報は瑞希ちゃんから聞いたことがあった。当時の被害者にも取材を申し込んで話を聞いたことがあるらしい。その人達曰く、とても恐ろしいものだったそうだ。人くらいの大きさ、見た目で頭は犬のような形、手は指がなく丸く、鋭い爪が生えている。目は血走り、口から涎を垂らして襲い掛かってきた。その姿はともこの世のものとは思えなかったという話だ。

適当にページを捲っていくと、有害、という言葉が目に入る。

ケルビムの体液には毒があり、それを飲み込んだり注入したりすると体に異常をきたすらしい。その効果は人によって様々で、例と

しては八年前にケルビムの体液を飲み込んだ四十代の主婦の全身に発疹ができ、四十度を超える高熱。それが一週間続いた後、全身麻痺。七十代の老人がケルビムの体液を浴びた二時間後、全身の痛みを訴え病院に運び込まれる。痛みは徐々に酷くなっていき、三時間苦しみ続けた後死亡が確認される。などの情報。その他にも様々な症例が挙げられていた。胸部疾患にかかる人や脳に異常がでる人など、多種多様だ。

それだけ色々な症状が書かれていながら、ケルビムが近くにいると具合が悪くなる、なんてことは何処にも書いていなかった。

中華スープを飲み干し、お盆を端へ避けてファイルを寄せる。

ページを捲っていくと、そこにはやはり一般に出回っている情報が殆どで、目新しいものなどなかった。研究は本当に進んでいないようだ。

ファイルを閉じる。ここのファイルに収められてる情報がこれでは、兄ちゃんが知っていることも同じような情報しか持っていないかもしれない。

ため息をつきお盆とファイルを持って、あたしは部屋を出ていった。

ボーダーライン

SSMSに入隊して一週間したある朝。あたしはいおちゃんに頼まれた書類を持って兄ちゃんのいる執務室へ向かっていた。施設内は意外と広く、ぼーっと考え事でもしながら歩いているとすぐに迷う。扉も同じようなデザインだから余計にだ。だがさすがに一週間もいると慣れてきて、あたしは迷わず執務室に向かうことができるようになっていた。

執務室の扉は他より若干豪華だ。扉の縁に模様がついてるなど、その程度のものだが。執務室はSSMSの各施設に一つしかない。そしてその部屋を与えられるのは責任者……つまり施設のトップのみだそう。あのシスコンでへらへら笑っているだけだった兄ちゃんがそんな良い地位にいるとは思ってもみなかった（昔から頭と人当たりはすごく良かったが）それを電話で母ちゃんに伝えると「知らない間に立派になったもんだ」と言っていた。

そんな兄ちゃんの執務室にたどり着き、扉を軽く二回叩く。しかし返事は返ってこない。もう一度叩いてみるが、やはり返事はなかった。扉のノブに手をかけ、回してみる。鍵はかかっている。そつと開き覗いてみると、兄ちゃんはソファに寝転がっていた。それはよかったのだが……。

「汚い……」

床には書類とおぼしき紙や本が散乱し、机の上は本とカップ麺の容器だらけだ。服などが置かれていないのが幸いか。

床に落ちていているということは踏んでも大丈夫な紙ばかりなのだろうが、念のため踏まないようにソファへと進んでいく。SSMS入隊手続き以来この部屋には入っていないが、この一週間という短い時間で部屋というのはここまで汚くなるものなんだと思った。あたしの記憶では兄ちゃんは結構綺麗好きだった気がするのだけど。

「兄ちゃん。朝だよ」

「ん〜？」

軽く揺さぶると兄ちゃんは気だるそうに目を開く。

「凜……？ どうしたの？」

「書類。いおちゃんが持っていていけって」

書類を差し出すと、兄ちゃんは渋々といった感じで起き上がる。

側のテーブルに置いてあった眼鏡をかけ、書類を受け取った。

「……これかあ……。面倒だなあ……。ふああ……。」

大きな欠伸を一つして、ソファーから立ち上がる。机に向かい手で本やらカップ麺の容器やらを除けて次々と床に落としていく。

「ちょ……。ちよつとちよつと」

「ん？」

「ん？ じゃないよ。片付けようよ」

きよとん、とした顔をした後、面倒くさそうな顔をされる。そんな顔をされても。

「僕くらい偉くなるとね、片付ける暇なんてないんだよ。仕事仕事で」

「……あたしと会ったときは、商店街の福引で蛙のぬいぐるみ当てるために仕事抜け出したっていおちゃんに聞いたけど」

「それはそれ。これはこれ」

笑顔でそう言われる。ちなみにそのぬいぐるみは実家に行った後でちゃんと当ててきたそうだ。くじ運の強いことで……。

「でも本当に忙しくてね、お風呂も入ってないんだよ」

「お願いだから入って」

「髭は毎日剃れって言われてるからちゃんと剃ってるし、パンツは替えてるよ？ 服はこのままだけど」

そう言われて、よく服を見てみると何だかヨレヨレだった。正直言葉も出ない。そもそもパンツ替えるために服を脱いでいるはずなのに、服は替えずにいる意味がわからない。

「四日間お風呂入れないとこの仕事に就いたことを後悔するけど、一週間過ぎるとどうでもよくなるよね」

につこりと笑われて、思わずため息をついた。兄ちゃんに近づき腕を掴んで扉の前まで連れて行く。そして外に出して扉を閉めた。「お風呂入って服替えてこないと兄ちゃんには近づかないし、仕事もさせないからね」

「ちよ、そんなあ！」

涙声で言われるが、それでもあたしの心は揺らがなかった。

「シャワー浴びるくらいの時間はあるでしょ！ 早く行ってきなよ！ その間に片付けとくから！」

兄ちゃんは扉を開けようとするが、あたしは全身に力を入れて扉が開かないようノブを引っ張る。力はそれなりにあるつもりだ。壁に足をかけ、これでもかというくらいに力を込めた。

しばらくして兄ちゃんも観念したのか、ノブを引っ張らなくなつた。

「わかったよ……。行ってくるよ……。マジ綺麗になって帰ってきてやる……」

風呂に入って服を替えただけでは清潔感が出るとかそれくらいにような気もするのだが、もう面倒なので突っ込まないでおいた。

「いつてらっしやい」

「いつてきます……」

声は凹んでいるふうだったが、気にしないでおく。

さあ片付けようと思ったときに、扉がノックされる。扉を開けると、そこにはいおちゃんが立っていた。

「あれ？ 薙斗は？」

「汚いから追い払った」

「あー……」

いおちゃんも思い当たるふうだった。気まずそうに目を逸らす。

「書類急ぎだった？」

「いや、大丈夫だ。しかし可愛い妹の力は偉大だな。俺があれだけ言っても風呂に向かおうとしなかったのに」

忙しい忙しいと言って、まったくお風呂に入ろうとしなかったら

しい。

出来れば二日に一回は入ってほしいなあと思いながら、あたしは部屋を片付けた。

お風呂に入ってさっぱりした兄ちゃんが戻ってくる頃、あたしは書類をまとめている最中だった。

兄ちゃんはすっかり寛ぐモードに入り、ソファーに座って呑気にお茶を啜っている。

「兄ちゃんさ……」

「うん？」

「あんなんじゃ彼女も出来ないんじゃない？」

さっきのような姿はちよつと……、という意味を込めて嫌そうな顔を向けると、兄ちゃんは固まった。

「兄ちゃんもいい年なんだしさ……」

「そ、そうですね……」

何だか声も硬くなった感じだったが、気にせず話を続ける。

「大体カップ麺ばかり食べるって……。母ちゃんが知ったら怒られるよ」

添加物入ったもんばかり食べてるんじゃないよ！ と母ちゃんなら言うだろう。放任主義だが食事にはうるさいのが母ちゃんだ。下手をすれば拳を振り下ろされ兼ねない。

「でもほら。ここって自炊しなきゃいけないじゃない？ だから面倒でさ……。俺がたまに作ってくれるけど」

毎回じゃないしね、とため息をつく。

「じゃああたしが作るうか？ 今の兄ちゃんは何言っても料理しなさそう」

昔の兄ちゃんなら言えばちゃんとやったんだろうが、さっきのお風呂の件といい、いおちゃんから聞いた話といい、どうにもやりそっになかった。

「いいの？」

「あたしが食べる時間でよければ」
そう言うと兄ちゃんは嬉しそうな顔をして頷いた。

その後料理を作り、兄ちゃんと二人で食事を取る。兄ちゃんは余程嬉しかったのか、わざわざ書類を整理する手を止めて、食べていた。

兄ちゃんのそんな姿に満足して、部屋をあとにする。
食器を片付け、外に訓練しに行ったときのこと。

上のほうから声が聞こえたような気がして、近くにあった木を見る。しかし人がいるような様子はなく、首をかしげる。

「
また声が聞こえた。何だか楽しそうな声だ。」

「あはははは！」
一際大きく声が聞こえ、上を見る。

建物の三階の窓に望がいた。しかも外側に。腕を突っ張り、その力だけで体を持ち上げ、窓際から中に向かって話している。

どう考えても望んでそこにいるふうだった。

友達との鬼ごっこで二階から飛び降りるくらいのやんちゃはしたが、三階はないなあと呑気に考える反面、一体どうということなんだろうと考える。

そうしていると、あたしの視線に気づいたのか望がこちらを見る。

「あー凜だー」

おーいと言って片手をぶんぶんと振る。あたしは振り返すべきか中に入るよう言うべきか迷う。

「じゃー私行くねー」

中に向かってそういうと、トン、壁と蹴って空中で一回転。そのまま落下してきた。

「え、ちょ………！」

慌てて落下してくると思われるポイントに走るが、望はあたしのそんな様子も気にせず笑っていた。着地寸前に膝を曲げ、地面に下りる。

これが当たり前かのような顔をした望は、驚きで心臓の鼓動が早くなったままのあたしに近づいてくる。大きなため息をついてしまったあたしの顔を覗き込み、きよんとした顔をする。

「どしたの？」

「どしたの、じゃないよ……。ケルビムに襲われたときよりびっくりした……」

のろのろと顔を上げて、三階の窓を指差す。

「あんなところから飛び降りたりして……」

「いつもだよー。玄関行くのめんどいから窓から出るのー」

「怖くないの？」

望は不思議そうな顔で首を傾げる。そしてうーんと言った後、口を開く。

「怖くないよー。飛び降りるのもケルビムと戦うのも平気ー」

両方とも慣れているからだろうか。望の表情からは本当に恐怖を感じ取れなかった。

「私は頭がおかしいから怖く感じないんだって。みんな言ってるよー」

そう言われ、どういうことだと考える。たしかに並の神経じゃ三階からは飛び降りないかと考えてみるが、周りには三階から飛んだ人物がいないので比べようがない。

「じゃー私墓地に行くねー」

あたしの前から移動して、地面に生えていたタンポポを筆取り取る。そしてさっさと墓地の方へと消えてしまった。

「どした凜。難しそうな顔して」

「あ、いおちゃん」

望の言ったことを考えながら歩いていると、いおちゃんが前から歩いてきた。

「うーん……あのさあ」

正直人に言っているいいものか迷ったが、みんな言っていることとは少なからず兄ちゃんやいおちゃんの耳にも入っているだろうと踏む。それにいおちゃんはここで施設の人間の治療や相談もやっているらしい。それなら何か情報があるだろう。あんまり人のことに首を突っ込むのもどうかと思ったが、どうにも望の言っていたことが気になって仕様がなかった。

「望が言ってたんだけどさ……自分は頭がおかしいってみんな言ってるって」

いおちゃんは何か言いたげな顔で目を逸らす。やはりこの話について何か知っているらしい。

「あー……ここじゃちよつとな……。雑斗のところ行くか」
「ん？うん」

先に歩き出したいおちゃんについていき、執務室に向かう。

ノックもせずに入ると、兄ちゃんは机に突っ伏して寝ていた。

机にあった書類を手に取ったいおちゃんは、その書類を握りつぶした。

「蛙だけ描いて寝るな」

兄ちゃんが握っていたボールペンを取り、首に突き刺す。兄ちゃんは首を押さえてがばつと起き上がった。

「いったあ！ ちよつと痛いよ！？ 何？ ドメスティックバイオレンス？」

「お前と家庭築いた覚えはないから」

夫になった覚えも恋人になった覚えもないしなと言いながら、蛙を描いていた（と思われる）書類を全部丸めてゴミ箱に捨て、残っていた書類を兄ちゃんの前まで移動させる。

「早くやれよ。お前他にもやることあるんだからな」

「嘘だー。僕やらなきゃいけないこと全部終わらせたよー」

目の前にある書類は何なんだと突っ込んだら負けだろうか。

「その書類終わってから言えよ」

いおちゃんは律儀に突っ込んでくる。ツッコミ気質は健在らしい。「もうやだ！ 仕事実験会議徹夜！ 僕だって安らぎの時間がほしい！」

兄ちゃんはいおちゃんを掴み揺さぶる。まるで駄々っ子のようだ。あたしもいおちゃんも、そんな兄ちゃんを見てため息をつく。

「嫌だっつてんなら仕様がなによな。れい」

「やります。やるからそれだけは」

何かを言いかけたいおちゃんの声に、兄ちゃんの声が被る。けどどうやら、それは兄ちゃんにとっては弱みのようだった。

あたしはソファアに座ってそんな二人のやり取りを見ているだけだった。

兄ちゃんが仕事を始めるのをしっかりと見てから、いおちゃんは向かい側のソファアに座った。

「で、望のことだったな」

「何？ 二人ともその話するためにここに来たの？」

始めたばかりの仕事を中断し、兄ちゃんが話しかけてくる。いおちゃんは苦笑しながら目をやった。

「アゼルに聞かれたらまずいだろ？」

「あー……極端に機嫌悪くなるもんねえ」

「アゼルに關係してるの？」

そう言うと二人は顔を見合わせる。

「してるような……してないような……」

「してるっちゃしてるけど……してないっちゃしてないんだよね」

「まったく関連がないわけじゃないけどな」

どうにも微妙なラインらしい。まあそれは置いて。

「望には何かあるの？」

二人とも黙りこみ、下を向く。ペンを走らせる音と時計の音だけが部屋に響く。

「……望は三年前にケルビムに襲われたんだよ」

長い沈黙の後、兄ちゃんが口を開く。

「そのときにご両親を目の前で殺されてね。自身も全身にケルビムの血液を浴びたんだ」

「俺達が駆けつけたときには殺される寸前だった。その後は身寄りもなくて、ここに連れてきたんだ」

そのときのことを思い出しているのか、二人の顔は何処か暗かった。

「ケルビムの血は有害なものだから、それを浴びた望は二週間、毎日全身の痛みに泣き叫びながら過ごしたんだよ。もう駄目だって思ったけど奇跡的に助かってね……。でも……」

書類を書く手が止まり、その目が悲しげなものになる。

「望は記憶を全部無くして、楽しいって感情以外全部無くして、痛覚も殆ど無くなった。それから体……足と一部の身体能力がおかしくなった。今じゃこの屋上から飛び降りたって平気な顔してる」
三階から飛び降りても何でもないような顔をしていた理由はそれか。楽しいという感情以外が無いのなら、勿論恐怖も感じないのだろう。

「身体能力がすごい人ならSMSにはいくらでもいるけど……中身が何かおかしい人っていうのはそんなにいないんだよね。少なくともここでは望が初めて。だから望は頭がおかしいって言われるんだよ」

「ケルビム倒しても人が目の前で死んでも、自分が怪我しても笑ってるだけなんだ。そりゃ周りから見たらおかしいだろうよ」

いおちゃんは懐から煙草を取り出し、火をつける。その目は兄ちゃんより悲しそうだ。

「周りの奴らから言わせるとな、血塗れになりながら笑ってる姿が気持ち悪いんだと。仲間だからと思って背中見せたらバツサリ切れそうで」

「攻撃……してくるの?」

「しない。倒すのはケルビムだけだと言ってあるからな」

それは要するに、『言われれば攻撃する』ということなのだろう。いおちゃんは疲れたような顔をする。一歩間違えれば敵になり兼ねない。それが望の危うさなんだろうと思う。

「望は誰の言うことを聞くの？」

「基本的に誰の言うことでも聞くよ。ただそうなるとやっぱり危ないから、俺と僕の言うことに従うように言っている」

「喧嘩ばかりしてた奴らが望使って相手ぶちのめすなんてこともあったな。相手は骨バキバキ折られて、もう一人は望の姿見て怖くなって逃走。望は俺達が止めるまで相手に攻撃し続けてた」

何も疑問を持たずに言うことを聞いてしまうということは、簡単に利用されてしまう。言葉をかけなければ敵味方の境界線が存在しない。その事実が尚のこと望が危うい存在に感じさせる。

「戦闘中は怖いって感じるかもしれないね。さっきも言ったとおり笑えばなしだから」

台所に立たせるのはものすごく危険だけど、と兄ちゃんは続けた。何があったのかと訊ねると二人とも目を逸らした。面白いくらい皿を割るとかその程度じゃ済まされないのか。

「奇行が目立つ場面もあるだろうけど、それ以外は問題ないって考えてくれていい。望は俺と行動することが多いから、危ないと思っただ行動は制御できる」

「そっか」

とりあえずはいおちゃんが望の手綱を握っていてくれるのか。兄ちゃんの手綱といい施設の人間の相談役といい、ご苦労なことだ。だけど昔からそういう役割を担っていたので、人を制御できるという点で信頼できた。

「望とは普通に接してやってほしい。お前となら年も近いし、何かあいつにいい影響を与えてやれるかもしれないから」

「……学校さぼったり、ちょっと悪いのをつるんでみたり、町で絡まれたら喧嘩してたあたしでも？」

「……多分」

呟くように返事をしたいおちゃんの声はとても小さく、兄ちゃんは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

そんな話をした後で、あたしと兄ちゃんは一緒に食事を取る。今日は鯖の味噌煮とほうれん草の御浸し、大根の味噌汁とご飯だ。

二人して黙々と魚の骨を取っていると、兄ちゃんが口を開く。

「そういえば母ちゃんから聞いたんだけど」

「ん？」

骨を取り終わり、骨を皿の端へと除ける。

「凜が最近体調崩してるんじゃないかって」

全然見てないようで案外しつかりとあたしのことを見ていてくれたらしい。

「どうなの？」

そう言った兄ちゃんの目は真剣そのもので、どう答えていいものが迷ってしまう。

「あー……ほら、戦うときにケルビムの血が散ったり銃使ったりで空気汚れるじゃない？ 病院行って見てもらったら先生が空気汚染を敏感に感じ取ってるんじゃないかって」

戦闘の影響で周りの空気が汚れて、そのせいで体調を崩す人は多いと聞く。最近ではそのことで病院を訪れる人も多い。薬も処方され、それで回復する人もいる。

本当は病院など行ってないが、そういうことにしておく。

「そんな状態で戦いに出て大丈夫なの？」

「まったくつらくないわけじゃないけど、少しでも早くケルビムがいなくなればって思うから頑張りたいたいんだ」

兄ちゃんは真っ直ぐあたしを見つめてくる。こういう目をしているときは、あたしが嘘をついてないか考えてるときだった。

「そうだね……。早くいなくなつて元の状態に戻れればいいね」

瞬きをしてあたしから目を逸らす。

綺麗に骨を取り除かれた味噌煮を一口入れ、咀嚼する。

「でも酷くなるようだったら言うんだよ。手遅れになってからじゃ遅いからね」

限界まで空気汚染による体調不良を我慢して、病気になった人もいるらしい。最悪隔離されるそうだ。そんな状態になるのはごめんだったが……。

「うん……」

自分がケルビムの存在を感じ取って体調不良を起こす、などと、SSMSの研究員でもある兄ちゃんには言えそうになかった。

暗い研究所。その一室には大きなカプセルが並んでいた。眩しいくらいに光るカプセルには異形の存在が一体ずつ入っていた。

その傍らで寝転がる男が一人いた。頬を床につけ、その冷たさを感じる。

「風邪引くわよ、樹」

床の冷たさに負けないような冷たい声が、上から降ってくる。

「引かないさ。俺馬鹿だし」

へらつと笑ってそう言うと、呆れたようなため息が聞こえた。

「こんなところで寝転がってないで、外にでも行ってきたら？ ケルビムの状態は私が見てるわ」

「そうだなあ……でもやることないしなあ……」

よつこらせ、と爺臭いことを言いながら起き上がる。女の頭のサイドでまとめられた髪が目映る。

「女の子でも物色してきたら？ 博士に恋愛事には制限されていないわよ」

制限されていないというよりは、その博士が興味ないだけだ。あの男が興味のないことは口にしないことを樹はよく知っていた。

「研究手伝ってりゃいいからな……」

欠伸を一つして、目を擦る。

「玲香は旦那に会いに行かないのか？」

「あれと毎日顔を合わせるのも大変よ」

そういえば旦那からの猛アタックで落ちたんだったなと樹は思い出す。冷血冷酷と呼ばれた玲香が結婚したときの驚きは樹もよく覚えていた。

「あーあ。俺も結婚したいなあ。可愛い奥さんほしー」

「探してきなさい。手近で済まそうと思っても未央には相手にされないわ」

もう一人の冷血の名前を出され、周りを見る。自分が床に寝転がった頃は機械を弄っていたのだが。

「未央は？」

「外へ行ったんじゃないかしら。考えたいこともたくさんあるみたいだったし」

「ふーん……」

腕を組んで未央が考えてそうなことを想像してみたが、まったく想像がつかなかった。話仲間で仕事仲間であるが、お互いプライベートについては関与していなかった。考えるのを止め、床に落ちていた上着を拾う。

「俺も行ってくるわあ。気の合いそうな可愛い子探しに」

「見つかるといいわね」

さして興味もなさげに答えを返される。相変わらず可愛げのない女だと思う。旦那もこの女の何処が良くて結婚したんだか、と。

「琴音の靴買ってくれた人も探さなきゃな……」

そう呟いて部屋を出ると、琴音が立っていた。その穢れを知らないような大きな瞳は樹を真っ直ぐ見つめていた。

樹が何も言わずに手を出すと、琴音はぱたぱたと走り寄ってくる。履いている赤い靴が目に入る。この暗い建物の中で、その赤はとも映えていた。血のような赤が、樹の心を揺さぶる。

琴音は樹の目の前で止まり、心の中を見透かすように見つめてく

る。そしてその小さな手を樹の手に重ねた。樹は力を込めてしまえば壊れそうな手を優しく握り、引いていく。

二人で暗い通路を抜けていく。出口に向かうにつれ、通路は明るくなっていく。出口につき、扉を開けたところで樹は立ち止まる。琴音は一步先に外に出ていた。

外と中を境目をじっと見つめる。金属で横一直線に作られた境目。樹はそこに、自分が越えることができないラインを重ねた。

「……俺も結構女々しいな」

ため息と一緒に言葉を吐き出すと、その線を踏みつけて外へと出ていった。

無慈悲な血

昼も程近い午前。薙斗と俺は遅い朝食をとっていた。

朝食を作ったのは凜。仕事終わりに二人して執務室のソファで眠りこけているのを見て、二人分用意してくれたらしい。当の本人は既にミナセと共に訓練をしているようで、微かにだが外から声が聞こえた。

二人は寝癖もそのままに黙々と食事をとっていた。といっても、片手に箸、片手に書類を持ってだが。急ぐ必要もない書類だが、運悪く出さねばならない書類がたくさん出来ることもある。それ故になるべくならすぐに書類を片付けておきたい。俺はそう考えていた。一方、薙斗は嫌々ながら書類を見ていた。自分だつて書類は早く片付く方がいい。しかし可愛い妹が作ってくれた美味しい朝食を食べながら書類を見る。それはこの朝食、延いては作ってくれた妹に対する冒瀆だと言い、まだ書類を見ない言い訳をしようとしていたが、一つのワードを出すことで黙らせた。

ちら、と薙斗の様子を窺うと、眉間に皺をよせながら食事を口に運び、書類を見ていた。まだ目が覚め切らないのか、首がカクン、と落ちたり目が閉じかけたりしていた。いつも掛けている眼鏡はずれて、微妙に傾いている。

「そーいえばさー……」

不意に薙斗が口を開く。

「凜は具合が悪くなったりするのは空気汚染のせいだつて病院で言われたらしいんだけど……」

「……あいつ酷い怪我でもしない限り病院行かないだろ」

小さい頃から病院が嫌いで、風邪をひいても行かないと駄々をこねて泣いたことがあった。大学に進学してからは会う回数が減り続けていたので、その後はどうかかわらないが、あまり変わってないように思える。

「僕もそう思う……」

会話はそこで途切れ、また食事を開始する。紙の音と箸と食器が当たる音、そしてため息以外は特に音が聞こえなかった。

「ミナセや他の戦闘員が言うには、眩暈を起こしてるような感じだそうだ。……他にも何かありそうだな。聞いても答えたりしないだろうけど」

「うん……」

また会話が途切れる。書類を見ながらでは食事も遅く、だんだんと朝食が冷めていくのを感じた。食べてから見たほうが早かったかもしれない。そう思いながらも続ける。

「……このこと関わりある子相手じゃ話さないだろうなあ……」

「お前の耳に入る可能性が高いからな。……あいつの友達とかは？」

「今の交友関係まったく知らない……」

少し不貞腐れたような声を出す。

「お前……友達のなかに気になる奴がいるとか、実は彼氏が……なんて聞くのが怖いんだろ」

薙斗は話さない。代わりに眼鏡の位置を中指で直した。

「凶星か」

少し無言になった後、眼鏡の位置を直すとき。それは凶星を指されたときに取ることの多い行動だった。

「別に凜だつてそれなりの年齢なんだし彼氏の一人や二人いても不思議ないし可愛いんだから言い寄ってくる男なんて五万といるだろうから別にそんな」

「わかったわかった」

声が微妙に震えている。こころなしか涙目になっているように見える。

「いい加減に妹離れしろよ」

「しようと思つて頑張つてたら、ここに入っちゃったんだけど」

間が悪い奴だな、と言うと眉間の皺が深くなった。薙斗本人もそれは感じていたようだ。

「そついやお前話したのか？」
「そう言つと、何が言いたいのかわかつたらしく、目をそらして」
「してない」と答えた。

時計の針が三時を指す頃、あたしは昼食を持って執務室へ向かっていた。本当はもう少し早く向かうはずだったが、運悪くケルビムが発生したのだ。訓練を終えた直後の出来事だったので、正直クタクタだ。

執務室の扉をノックする。兄ちゃんは「別にしなくていいよ」と言ったが、一度偉そうな人（聞くところによると国のお偉いさんだとか）がいたので、それからはノックをするようになった。

「どうぞ」
促され入ると、兄ちゃんは机の上で突っ伏していた。

「どうしたの」
「疲れた……」

今にも力尽きてしまいそうな声で言い、気だるげに顔を上げる。

「お昼ご飯何……？」
「オムライスと野菜サラダ。あとにする？」

「食べる……」
体を起こし、大きく伸びをする。息を吐いて立ち上がり、ソファ
ーに来る。

「つい三時間ほど前に朝ご飯食べたけど、結構お腹空くもんだね。
大して動いてもないのに」

「それだけ頭使ってたんじゃないの？」
「そう言いながら床を見ると、書類が何十枚も散乱していた。拾って読んでみても内容はよくわからない。書かれていることが全て英文
だったら尚更だ。」

あとで片付けたほうがいいかな、などと思いながら遅い昼食を開始する。

「いただきまーす…… オムライスなんて久しぶりだなあ」

「しばらく食べてないな」と思つてさ。訓練やらケルビム討伐やらで疲れてて、どうしても楽なもの作ろうとしちゃうんだよね」

そう言つと兄ちゃんは苦笑した。

「あんまり大変だったら自分の分だけでいいんだからね？」

「大丈夫。ストレス解消になつてるから」

毎日料理を作るのが日課だったため、SMSに入ってから料理は自分自身を安心させる大切なものになつていた。ケルビムと戦うなど、運良くケルビムに遭遇しなかつたあたしには非日常なことだった。だが今はその非日常に足を踏み入れている。戦うことが当たり前になつている。そんななかで料理はあたしを平和な日常に戻してくれる大きな存在だった。

「母ちゃんが聞いたら睨んできそうだね」

「料理をそんなことに使うなつて？」

「いや。そんな馬鹿みたいにストレス溜めてんじやないよ！つて」

「あー言うかも」

放任主義な母ちゃんは、あたし達が危ないことをしてもあまり止めない。人様に迷惑かけたらぶつ飛ばされるけど。しかし心配してないわけではないらしい。寝込んだときは店を早く閉めて看病してくれるなどということもあるのだ。……あんまり寝込んだことないけど。

「そういえばさ」

「ん？」

「兄ちゃんつて蛙好きでしょ？」

「うん」

「食べたりしないの？」

常々疑問に思つたことを口に出すと、兄ちゃんは少し悲しそうな顔をした。

「僕……そこまで野生児ではないかな。食べるものには困つてないし……」

大体嬉々として蛙食べる僕なんてどうなの？と聞かれ想像すると、あまりいいものではなかった。

「蛙はね、鳴き声聞いたりお腹つついてぶにぶにするのが楽しいの。食べるなんて論外なの」

「好きだからこそ、っていうのがあるかなーって」

兄ちゃんは首を横に振る。さすがに無理なのか。食べていたら感想を聞きたかったんだけど。

そこから会話は続かない。様子を窺うと、別に蛙のことで機嫌を損ねたわけではなさそうだった。ただ何処か緊張してるような感じで、目を泳がせている。

「……何かあったの？」

「へっ？ あ、いや……」

問いかけに声が裏返る。あたしのことのような気がする。

「あ、あのさ……」

ものすごく聞きにくそうにする。目の泳ぎ方もさっきの比ではない。そんな絶え間なく動かして疲れないのかな、などと思いながら、兄ちゃんが話すのを待つ。

「り、凜の交友関係とか気になるなーなんて……はは……」

「交友関係？」

それを聞きたがる割には様子がおかしい。……何だか涙目だ。本当は何が聞きたいのか。何となく予想はつくが、兄ちゃんの心の準備が整うまで友達のことを話すことにした。

「うーん。深い付き合いの子はいないなあ。あんまり一緒に遊びに行くようなのもいなかったし」

「そ、そうなんだ」

「あ、でも真城は別。よく遊んでた」

真城、と口にした瞬間に兄ちゃんが固まった。

「あとねー何だか避けられてるっぽいんだけど、日向って子がいるよ。真城はあたしと同じタイプ……だと思っけど、日向は全然別。すごいおとなしいの」

そこまで言って様子を見ると、兄ちゃんは少し難しそうな、そしてどこか悲しそうな顔をしていた。

「……真城って子はどんな子？」

「んー……あたしの通ってた高校ってね、素行が悪いとかそういうの全然なかったの。平和そのものっていうか。でも真城は町中で喧嘩するわサボるわ……。本人は平和に暮らしたいみたいなんですけど、どうも絡まれやすいみたいなんだよね。目つき悪いから睨まれてるもんだと思ってた奴が突っかかってくるの」

たまたま一緒に出かけていたときに真城が絡まれたことを思い出す。あたしが自販機に行っている間に突っかかれたらしく、真城を含む複数の怒鳴り声が聞こえ、慌てて戻ったときにはもう遅かった。殴る蹴るの大喧嘩。警察を呼ばれ学校に連絡を入れられ、一緒に行動していたあたしも呼ばれたのだ。町の人が『先に手を出したのは真城じゃない』と言ってくれなかったら、真城の処分は酷かったかもしれない。

「ちよつと短気なところもあってね。散々喧嘩ふっかけられて嫌な思いしてるから、絡まれるとキレ気味になっちゃって……。結構面倒見いいんだけどねー」

「そうなんだ。……日向って子は？ 避けられてるっぽいって言うてたけど」

「あたしはなるべく人と仲良くしたいほうだけど、日向は人を寄せつけたがらないの。その辺がちよつと違うもんだから、この間逃げられちゃった」

「逃げ……」

兄ちゃんは苦笑する。

「あとケルビムに詳しいよ。気になったこと聞いてみたら、すぐ答え返ってくるくらいには」

「へえ」

「たまにケルビムに遭遇するって言うてたけど、怪我したりすることは殆どないみたい。むしろ他の人にやられた傷のほうが多いとか」

それを聞いて、しばらく無言になる。それから、ふと気づいたように顔を上げた。

「他の人？」

「真城とはまた別の意味で絡まれるみたい」

「嫌な共通点だね」

「うん」

その共通点を知ったとき、二人に言ってみたら真城も日向も微妙そうな顔をしていた。嬉しくない共通点ではあるが、あのときの冷えた空気はたまらなかった。

「そっかー……」

背もたれに寄りかかり、兄ちゃんは息を吐く。

しばらく無言の時間が続く。心の準備が整いそうだなと思い、兄ちゃんが口を開くのを待つ。

あたしは食器を重ね、片づけを始めた。それもすぐ終わってしまったが、その時間だけで覚悟を決めたいらしい。兄ちゃんは身を乗り出し、見たことも無いくらいクソ真面目な顔をしてこう言った。

「それで、どっちが彼氏？」

予想通りの問いに呆れながら「彼氏はいません」と答え、あたしは立ち上がった。

「っっていうことがあってねー」

日も沈み始めた十七時。あたしは望と二人で、町中のパトロールをしていた。ある程度人員のいるSSMSの施設だと、こまめにパトロールをすることになっているらしい。あたし達のいるところは朝六時から二時間おきにパトロールをする。ペアを作って、五組が町中を回る。本当はミナセと行くはずだったが、ここ最近のアゼルの機嫌の悪さが異常で、さすがにどうにかすることにしたらしい。お守りは大変だなあなんて思いながらパトロールはどうなるのかと聞いたら、暇だった望と組むことになった。

前に聞いた話のこともあり、少し不安だったが、今のところ問題は特にないのでよし。

「真城はともかく日向は無理じゃない。避けられてるんだから」

「その辺はきつと耳に入らなかつたんだよ。倉坂はシスコンだし、けらけらと笑いながら望は言う。」

「もう二十八なんだから妹離れしてほしいよ……」

「まだ無理でしょー」

「だよねえ……」

本気で兄ちゃんの行く末が気になる。女の人から見て三十路近い男がシスコンなのはどうなのか。マザコンよりマシなのか。

「シスコンな貴方が好きっ！ って人はそんなにいないよなあ……」

好きな人でも出来れば変わるだろうか。あたしも兄ちゃんは好きだけど、さすがにヨボヨボになっても過剰に心配されたりするのは嫌だ。

「望から見てシスコンな男ってどう？」

「……………」

望が悩んでいる。いつもの笑顔のまま首を傾げている。望でも困るような質問だったか。

しばらく首を傾げたまま過ごし、その首を元に戻す。

「無理ー」

「そうですか……」

絶望的か。そう思って頂垂れる。

そんなときだった。比較的近い場所からサイレンが鳴る。望が走り出し、あたしも後に続く。

ケルビムが発生した場所に確実に近くなっていく。それにつれて吐き気と頭痛が酷くなる。少しふらついてしまい、望との距離が開いてしまう。頬を手のひらで少し強めに叩き、不調を堪える。全力で走り、もう少して望に追いつくというところで、望が立ち止まる。慌てて速度を緩め、衝突を避ける。それとほぼ同時に、前方の曲がり角から人が出てきた。

「あー玲香だー」

望がその人を指差す。玲香と呼ばれた人もあたし達に気づいたらしい。だんだん走る速度が落ちてくる。望の前まで来ると、近くの電柱に手をつけて胸を押さえ、呼吸を整えていた。

サイドに纏められた黒髪がぱらり、と落ちて、その人の顔に影をつくる。

「望……あなた立ち止まってないで助けようとは思わないの？」

少しばかり怒気のこもった声で言われるが、望は特に気にする様子もない。

「玲香が通ってきた道は狭いもん。危ないよー」

「そういえばあなたの攻撃は大振りだったわね……」

玲香さんは電柱にもたれかかる。

「そろそろ来るわよ」

そう言つて通つてきた道を見る。警戒していると目の前が歪んだ。首を横に振つて、前方を睨む。

大きな手が出てくる。長い舌が伸びてくる。猿に近い顔が出てくる。その顔には血走った目が三つ見えた。

「凜ー気をつけてね。もう一匹いるよー」

望はそう言つて走り出す。着ていたオーバーオールポケットから爪のついたナックルを取り出し、握る。ケルビムが腕を振りおろしてくるが、望はその腕を爪で刺す。振りぬいて裂き、体めがけて突進。ふところに入り込み胸部に爪を刺しこむ。

背後からぺたり、と音が聞こえた。あたしはぺたぺたと足音を立てるケルビムと縁があるようだ。

ケルビムの方を向き、腰からぶら下げていた剣を抜く。こちらのケルビムは全体的に猿に近かった。ただ腕は短い。その代わりに足が長い。その目は黒く丸く、見つめていると不安になりそうな目だった。

剣を中段に構え、様子を見る。ケルビムもどうやらあたしの様子を見ているようだった。ケルビムはゆっくりと近づいてくる。

腕ならともかく、足を使って攻撃をしてくるのならリーチは向こうの方が長い。道の広さを考えると、逃げ回るのは難しいかもしれない。力がどれだけあるのかはわからないが、剣の強度を信じることにして、走り出す。

ケルビムは飛び上がり、上からあたしを押しつぶそうとする。前方に飛び上がり回避。剣を下段に構えて振り返り、そのまま切りつける。振りぬいた剣を掴まれる。手首を思いきり蹴り、力が緩んだ隙に心臓に一突き。力を込めて奥に押し込んでいく。剣が根元まで飲みこまれる。引き抜くと傷口から血が飛び出し、顔や体にかかる構わず目と目の間に剣を突き立てた。ケルビムは少し震え、腕を掴んでくる。反射的に振り払い、一歩離れる。

まるで何かを呟くように口を動かした後、ケルビムは前方に倒れる。剣が押し込まれ、後頭部から切っ先が飛び出た。

動かなくなつたのを確認して、緊張をほぐすように息を吐いた。気分はあまり良くない。体に血がついているからだろうか。

望のほうを見てみると、倒されたケルビムを片足で踏みつけ、大きく腕を振り上げていた。勝利のポーズだろうか。少し見ていると満足したのかこちらに駆け寄ってくる。

「お勤め終わりー。今日の戦績は二勝零敗です！」

「どうやらあたしの分も含まれてるようだ。」

「相変わらず呑気ね」

玲香さんは先ほどと表情が変わっていないが、声には呆れが含まれていた。

「玲香は相変わらずサイボーグー」

「そこまで機械的じゃないわよ」

表情にも呆れが現れ始めた。ため息をつき、あたしの方を向く。

「あなた新しい戦闘員？」

「あ、はい」

「じゃああなたが鷹白凜さんね。私は華寺玲香。町の外れにある樫木研究所の者よ」

よろしく、と言って手を差し出してくる。

「よろしく願います」

その手を握り返す。細い手だった。気分はまだ悪いまま。

「今施設に倉坂はいるかしら？ 彼に用事があるのだけど」

「あたし達が出てくる時にはまだいました」

「現実逃避してた」

玲香さんの眉間に少し皺がよった。不真面目な兄で申し訳ない気持ちになる。

「まあ今に始まったことじゃないわね。私が行けば嫌でも真面目になるでしょ」

施設に向かって歩き出す。何か弱みでも握られているのかと思う。隙だらけなので握ろうと思えばいくらでも握れそうだ。

施設に着くと、門のところでもミナセがしゃがみこみ、ぐったりしていた。疲労困憊といった感じた。

「久しぶりねミナセ。疲れてるのは倉坂の不真面目さのせい？ それとも弟のご機嫌取りのせいかしら」

「両方……」

その声は昼食の時に聞いた兄ちゃんの声と似た感じだった。心底疲れきつていると言いたげな。

「倉坂はともかく、弟は自分でどうにかしなさい。私情を挟みすぎるのは他の戦闘員の負担が増えるだけよ」

「うん……」

何かもう消えてしまいそうだった。

「大丈夫？」

「大丈夫……」

明らかに大丈夫じゃなさそうな声に不憫になってくる。ふと周りを見ると望はもういなかった。

「早めに休みなさい。明日に疲れを持ち越さないようにね」

ミナセは無言で頷く。横を通り過ぎ、ちら、とミナセの様子を窺うとジャケットのポケットから煙草を出し、吸い始めた。

「ストレスが溜まってるみたいね」

「え？」

執務室に向かって歩きながら玲香さんと話す。

「ミナセよ。ストレスが溜まったり行き詰ったりすると煙草吸うのへえ」

それだけ兄ちゃんとアゼルのことが堪えてるのか。兄ちゃんに何か言っておいたほうがいいんだろつか。アゼルは話も聞いてくれなさそうだ。

「大変ね。そのうちストレスでどうかなるんじゃないかしら」

「怖いこと言わないでください……」

戦闘員一人減るだけでも痛手なのに、その中でもトップクラスの強さを誇るミナセに何かあったら本当に大変なことになりそうだ。

執務室が近くなるにつれ、何だか物音が大きくなってくる。

玲香さんが突然歩みを速める。そして執務室の扉をノックもせず
に開けた。

「……………」

「……………」

兄ちゃんは袖を捲り、ゴミ箱に入りきらなかったのである。ゴミ箱を棚に詰め込んでいた。

「い、らっしやい……」

声は固まり、兄ちゃん自身もその場から動けなくなっているようだった。

「執務室は綺麗に使うこと」

「うっ」

「棚に何でも詰め込まないこと」

「うっ」

「書類は常に整理し、分類分けしておくこと。……貴方と約束したのはこの三つだけだわ」

「すみません……」

兄ちゃんは完全に縮こまっていた。見るからにいっぱいいっぱいだ。

玲香さんは本当に兄ちゃんに何をしたんだろうか。

「まあいいわ。私もまともに守れているのは三つ目だけだもの。さすがに棚にゴミは詰め込んでないけど」

床に正座をし、罪人のように頂垂れる兄ちゃんを見たのは何年振りだろうか。何だか新鮮だが、玲香さんの何が兄ちゃんにそこまでさせてしまうのか。

「兄ちゃん……玲香さん相手だと弱すぎない？」

「い、いやぁ……その……ははは……」

「何で泣きそうなの？」

これ以上つついたら窓から飛び出すんじゃないだろうかと思うくらい、兄ちゃんは動揺している。

「……話してないの？」

「う、うん……」

玲香さんは何か言いたげに口を開くが、ため息をついて止める。

「自分で言ったほうがいいと思うわ。相手は家族でしょう？」

「……………」

いまいち何が言いたいのかわからない。いや、まだ理解したくないのかもしれない。心の中では二人がただならぬ関係だと気づいているが、その関係の中の兄ちゃんは、あたしの知らない兄ちゃんだった。それを聞いたとき、あたしはきつと知らない悲しみよりも驚きが上回るのだ。あたしの想像以上のものを。

「えつとね……凜……」

兄ちゃんは立ち上がり、玲香さんの隣にくる。しばらくあたしを見つめたあと、覚悟を決めたように口を開いた。

「玲香は……僕の、奥さんなんだ」

開いた口が塞がらない、というのを、あたしは初めて味わうこととなった。

「口パクパクさせて、魚みたいだったわね。彼女」

「まあ……驚かれるだろうなあとは思ってたよ」

日付も変わろうかという頃、薙斗と玲香は執務室のソファで向かい合って座り、珈琲を飲んでいた。テーブルには書類が六枚置かれていた。

「話したら彼女が離れていくと思ったの？」

「いや……」

「入隊してから二週間。話そうと思えば話せたと思うけど」

正面から真っ直ぐ見つめられ、薙斗は目を逸らす。

「兄妹間のことだから別に構わないと思うけれど、時間が経つほど言いにいなくなっていたと思うわ。その間にも貴方のシスコンは進んでいくんだし」

「うっ……」

シスコンはともかく、言いにいくなるとは思っていた。前に『彼女出来ないんじゃないか』と言われたとき、チャンスだとは思ったが何となく言えなかったのだ。変わったのは自分の方なのに、凜が離れていってしまうんじゃないかと思った。

「凜が……僕の見方を変えるんじゃないかって思ったんだ。今離れられたら困る」

「何かあるの？」

薙斗は一枚の書類を玲香に渡す。

「ミナセくんに頼んで凜に軽く怪我させた。俺のところに連れてって治療したよ」

「……訳を話して採血しようとは？」

「注射をすごい嫌がるんだ」

昔の影響ね、と呟いて書類に目を通す。

「ケルビムの血が混ざってるわね。今はまだ大丈夫でしょうけど、将来はどうなるかわからないわよ」

「もう影響が出始めてる」

玲香は雑斗を見つめる。今にも泣きそうな顔をして俯いていた。

「私達とどちらが早いかしらね。……ミナセや流より先になるとは思えないけど」

他の五枚の書類を見る。そのうちの二枚にミナセと流の名前があった。あとの三枚には真城、日向、瑞希の名前がある。

「……この三人は？」

「他に『飲んだ』人間」

「そう」

書類を纏めてテーブルに放り出すと、凜の書類だけが床へ落ちていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5716i/>

Giselle

2011年2月2日03時00分発行